

539  
35



始







フランツ・ペートリ著

友岡久雄譯

マルクス  
價值論の

社會的研究

發兌 弘文堂書房

〔社會思想叢書第四編〕

大正  
15. 3. 9  
内交



## 譯者序

『マルクス價值論の社會的研究』はフランツ・ヘートリの『マルクス價值論の社會的内容』(Franz Petry: Der soziale Gehalt der Marxschen Wertheorie, Jena, 1916.) とタチアナ・グリゴロヴィッチの『マルクスとラッサールの價值論』(Tatiana Grigorevici: Die Wertheorie bei Marx und Lassalle, Wien, 1910.) の拙譯に譯者が勝手に名付けたものであります。譯者は初め前者のみを單行本として發表したかつたのであります。そして『マルクス價值論の社會的研究』なる表題もその折前者に因んで擇んだのであります。書肆の都合上、題名はその儘に更に後者を加へる事にしたのです。紙の分量から云へば、後者は前者を凌ぎますが、譯者の置く重點は後者より寧ろ前者に在りますので、敢へて後者を附録として卷末に配した次第です。



フランチツ・ペートリその人に就ては既にカルル・ディール教授の感銘深き文字「フランチツ・ペートリを偲びて」に盡きてゐると思ひますから、更に茲に贅する迄もありません。又ペートリの勞作がマルクス價值論の研究上如何なる重要さを持ち如何なる地位を占むるかを指示するが如きは淺學なる譯者の到底企て及ぶ所ではなく、偏へに大方の教示を受け度いと思ひます。譯者は唯、少くとも理論經濟學に關する限り價值概念は之を社會概念に係はらしむる事なくしては、或は價值論は之を社會的内容に推及する事なくしては到底明快に理解し得ないとするならば、そしてマルクスは、その方法及び結論の是非は暫く別問題として、明に之を意識して價值論を構成し、斯學の上に夫のみにて既に没し難き貢獻を齎したとするならば、果して然らば、ペートリの「マルクス價值論の社會的内容」が邦譯せらるゝも必しも無益でないであらうと信じます。勿論その方法及びその論斷に就ては、就中價值法則を彼の所謂價值觀察に従屬せしめ、第一卷に對して第三卷が矛

盾するに非ずして寧ろ第三卷に對して第一卷が矛盾するとするが如き、當然問題が在り得るでありませうが、所謂マルクス的方法と稱せられる一種の唯物論的觀方に依らず、別個の見解からマルクスの中に於ける一の思想を抽出して統一的説明を試みたからと云つて、夫が直に社會科學上の反動派だとは云ひ得まいと思ひます。當に然るのみならず、斯の如き措置はマルクス價值論の理解乃至發展に對して少からぬ示唆を持つてゐると思ひます。夫は兎に角、ペートリは、一八八九年に生れて一九一五年未だその勞作の世に出するを俟たず戰地に没したのですから、その著作は日本流に數へて著者の二十七歳の時に成りその儘不幸にも遺稿となつたのでありますが、今年同じく二十七歳なる譯者には多少の感慨無きを得ません。即ち本書の翻譯書には譯者が自己の菲力菲才を鞭打つ意味の私的理由もあつた譯であります。

附録として加へたグリゴロヴィッチの論文はラッサールと關聯して極めて通俗



なるマルクス價值論の解釋を示したもので、茲に附録として採録するには必しも適當でないかも知れませぬが、夫が専らマルクスの所謂『社會的に必要なる勞働概念』を中心に論せられておる事と價值と價格の關係に關し論斷の結果は略々同じくても前記ペートリの論文とは凡ゆる點に亘つて極めて著しい對照をなしてゐる事とが、夫自ら一個の興味である許りでなく、ペートリの論旨の理解に資する所少くないと思ひます。

最後に孰れも譯者多忙の中に成つて、さなきだに醜い譯筆が一層澁滯、粗雜を極めておる事に就て深く讀者諸子に謝意を表し御叱正を賜り度く存じます。

猶ほ本書の出版に就て一方ならぬ御配慮に與つた嘉治隆一氏に厚く謝意を表します。

大正十四年十二月一日

東京府下中野にて

譯者

## マルクス價值論の社會的研究目次

マルクス價值論の社會的内容(フランツ・ペートリ)……………頁

カルル・デール序(フランツ・ペートリを偲びて)……………頁

序論マルクス主義的方法的・二元論……………頁

(マルクスと古典學派及び俗流經濟學派との關係)

第一章 質的價值問題……………頁

第一節 社會的生產關係……………頁

(一)形式的

(二)實質的

目次



第二節 社會的生產關係と法律關係……………二二

- (一) マルクスとシユタムラー
- (二) 生産關係と法律關係
- (三) 唯物史觀に於ける生産關係と法律關係

第三節 社會的生產關係としての勞働關係……………三〇

- (一) 質的及び量的價值問題
- (二) 使用價值は社會生産關係を表現するに適せず
- (三) 社會的生產關係分拆手段としての勞働
- (四) 偶像崇拜

第四節 抽象的—普遍的勞働の概念……………四四

- (一) 抽象的—普遍的勞働
- (二) 等一なる勞働
- (三) 單純なる及び複雑なる勞働
- (四) 社會的に必要なる勞働

第五節 マルクス價值論の普遍的性質……………五八

- (一) 價值は交換と何等の關係なし
- (二) 價值の「實體」としての勞働
- (三) マルクス價值論は一種の社會的分配論である

第六節 マルクスとリカルドの關係……………七〇

第二章 量的價值問題……………八〇

第七節 價值の「實現」……………八〇

第八節 マルクス體系に於ける競争……………八七

- (一) 内面的關係
- (二) 競争の「外觀」

第九節 資本論第一卷と第三卷との關係……………九五

- (一) 相對的剩餘價值論に於て立證された競争の眞面目
- (二) 資本論第三卷は「價值法則」に非ずして「價值觀察」を論ず



第十節 社會的に必要なる労働……………一〇八

第十一節 マルクスの價值論と限界效用説……………一一三

(一)兩者の相違は「社會的」立場である

(二)斯くの如き社會的立場は如何なるものでないか

(三)形式的性質のマルクスの社會概念

第十二節 マルクスの貨幣論……………一二九

附 録

マルクスとラッサールの價值論

(タチアナ・グリゴロヴィッチ)

序 言……………一

第一章 從來の批評の範圍に於けるマルクスの價值

論とラッサールの價值論との相違……………七

第二章 マルクスとラッサールに於ける價值構成的

要因としての社會的に必要なる労働の概念……………三三

第三章 マルクスとラッサールに於ける價值構成的

労働の特質……………二六

第四章 マルクスの貨幣論とラッサールの價值論と

の矛盾……………三九

第五章 ラッサールに於ける價值構成と社會的事情……………五九

第六章 ラッサールの理想主義 (ラッサールのマル

クス價值定義誤解の主因)……………七七



マルクス価値論の社会的內容

フランツ・ペートリ著  
友岡久雄譯



## フランツ・ペートリを偲びて

此の論文の筆者、ドクトル、フランツ・ペートリは最早親しくその著作が世に出るのを見ることが出来ない。——ペートリは一九一四年五月大學を卒へるや、偶々大戰の勃發に會ひ忽惶として兵役に就いたが、間もなく重患に襲はれ夫が爲に一旦軍務を去り、數ヶ月間をメランやアツパチャに靜養するの已むなきに至つた。本年の六月、彼が病癒えて當地に余を訪ねた時、彼は、七月一日から暫くの間その生れ故郷、フランクフルト・アム・マイン市に於て軍人としての仕上げを受ける筈であるが、そしたら直ぐ戦線へ行く積りだと告げた。彼はその時、余がその軍隊教練の期間を利用して彼の學位論文を印刷に附し校正するやう忠告したのに對しさうすると云つたが、越へて八月二十日、余に書を寄せて、自分はツォッセンで砲兵中隊へ參加の命令を受け取つた、夫が爲に自分で此の論文を立派に仕



上げて出版することは覺束ないと云つて來た。彼は余に、自分に代つて訂正完了迄の最後の色々な手續を濟まして頂き度いと請ふた。所が、十一月の初め、フランツ・ベートルは九月二十九日戦線へ進軍中グイルナのラザレットに於て死亡したと云ふ驚くべき報知が當地に達した。君が依頼の仕事は、若し君が生きてゐるのだつたらどの位喜こんで果したであらうものを、既に幽明境を異にする君が爲に引き請けるとは余にとつて洵に痛ましい義務である。余は今未だ清刷迄になつてゐなかつたボーゲン刷の最後の校正を終つた。此處に於て余は、此の青年學者の生涯とその發展の過程を簡單に述べて見たいと思ふ。

フランツ・ベートルは一八八九年五月十七日フランクフルト・アム・マインに生れた。彼は同市の模範實業學校に入つたが、その時彼は數學並に自然科學に對する非凡な天稟を示した。一九〇七年復活祭に卒業試験を濟ますや、彼は自分自身の志嚮と云ふよりは寧ろ父の希望に従つて父祖の商賣に入り、商人階級に身を投

じた。彼は商人として活動する傍ら、フランクフルトの社會科學及び商業科學の専門學校に於て法律的及び國民經濟的研究を進めた。一九〇八年の復活祭の砌り、彼はベルリンに引移つて或る商賣に携つて商人としての磨きをかけることになつた。併し斯様な實際的活動は彼を次第に不満にした。そこで彼は遂に意を決して一九〇八年の夏學期にはベルリン大學でその研究を續行することにした。その時經濟學の講義の外に哲學の講義をも聽いた。一九〇九年の秋、彼はフライブルグへ來た。さう斯うする間に彼は既に商人になる目論見を捨て、終つてゐて、今や滿腔の熱意を以て法律的及び經濟的研究に没頭した。が併し間もなく國民經濟學を彼の主たる専門に選んだ。一九一一年の復活祭から一九一二年の夫まで、彼は再びベルリンに在つて研究したが、一九一二年の夏から秋にかけては數ヶ月間を英國に滞留し、初めオックスフォードに、後倫敦に移つたが、其處では英國博物館の寶庫を利用して古典派經濟學に關して研究した。一九一二年の復活祭か



ら彼は再びフライブルグに來つて研學を續け竟に一九一四年五月二十七日最優等の成績を以て大學を卒業した。

斯くの如き短日月の間に如何に豊かな學問的生涯が展開せられたか、外面的な事柄丈では認識せしむる事が出來ぬ。彼に親しく接してゐたものゝみが、彼が如何なる理想主義を以て、如何に深刻なる透徹と純真とを以て自己の諸の研究を捕捉したかを知つてゐる。自己の専門外に哲學的問題が常に彼の興味を惹き附けた。之より嚮彼はその哲學的研究をベルリンに於てリールの許で始めたが、フライブルグに於てはリツケルトの許で繼續した。獨逸の理想主義的哲學は最も多く彼を惹き附けたものであるが、彼は輓近の諸哲學體系にも通曉してゐた。——緊密な友情が彼とシエーニッツとを結び附けた。尤もそのシエーニッツは彼が共に相携へてベルリンやフライブルグに學んだ人であるが、大學の競走場で起つた椿事の後、既に今春死神の奪ひ去る所となつた。シエーニッツとペートルは、忽

ち、當時フライブルグ大學に集ひ研究室や前研究室プロセミナールや演習に於て各自研究に没頭してゐた少壯經濟學者仲間の『指導者』となつた、蓋し、二人共揃つて精勵研鑽に日も足らず、只管學問その者の爲に學問に奉仕し、全く之に没入したのであつた。ペートルが、如何に嚴肅に深刻にその研究を把握したかを證するものは實に本書である。古典派經濟學及び科學的社會主義が吾人に提供した諸問題を既に根本的に理解しており、同時に既に認識論的に訓練されてゐたものにして始めてマルクス價值論の社會的内容と云ふが如き論文をものすることが出来るのである。マルクスに關する著書は、既に汗牛充棟も只ならぬが、ペートルは、彼の取り扱つた問題に猶ほ一新生面を克ち得ることに成功してゐる。ペートルの與へた解決に同意しないでも、誰しも彼の思索を運ぶに犀利にして明敏なるには驚嘆するであらう。——ロシアの曠原遙かに吾が若き秀才學徒の軍人慕標はある。吁吾々は此の優秀な天稟を惠ぐまれた青年から彼の聰明と精進とが結ぶ猶ほ幾多の成果を



期待することが出来たであらうに。戦慄すべき大戦の悲劇よ、汝は此の如き人々が漸く彼等本來の活動舞臺に登場せんとする刹那に彼等を奪ひ去る！此の如き損失の如何に大なるかを思ふ點では、余は、彼に親しく接し、同時に彼に於ける人間らしさ、即ち彼の常に情深く、優雅で謙遜な性格を非常に尊敬してゐる余の同僚や彼の研究仲間全部の人々と全然一致してゐる事を知つてゐる。願くば、彼の高雅なる人格が斯學に携はる多數青年學徒の爲に刺戟となり、模範となつて彼等の生涯の課題を理想的に捕捉せんことを。

一九一五年十一月

フライブルグ、イム、ブライスガウにて

カール・デュール

## 序論

マルクスの經濟學説がその諸々の成果を獲得するに際して一個獨得の方法を進展するものなることは、マルクスが、彼と古典學派並に彼が「俗流經濟學」と呼んだ學派との反對を強調する場合に特に力説した所である。併し斯くの如き方法そのものを明快に描き出すことは仲々困難である。と云ふのは、マルクスの實證論的な性向は彼をして一切前置きの、方法論的認識論的言説を厭はしめたからである。彼は夫を素材その者の中に組み込んで了つたので、吾々は今更にこの素材から夫を推敲し上げねばならぬのである。マルクスが態々方法的事柄に就て論ずる積でゐた唯一の論文、一九〇三年にカウツキーに依つて公にせられた「經濟學批評序論」は未完稿の儘である。夫を明快に捕捉しない間はマルクス價值論の批評的研究は不可能であるが、而も夫自體も決して明瞭でない一個獨得な方法が存



在することはエンゲルスの言葉に基づくものである。エンゲルスに従へば、『此のマルクスの經濟學批評の根底に横はる方法を推敲し上げることは重要さに於て夫の唯物論的根本觀にもおさしく劣らぬ成果だと思ふ』と。

とは云へ、マルクスの經濟學を支配する方法的根本思想を明かに意識に齎さうとする企ては諸々の重大な困難に逢着する。何故と云ふに、全くマルクス主義なるものは、常に經濟生活に關する科學的理解を與うることを要求する許りでなく、一の包括的な歴史哲學をも、換言すれば、獨り過去の幽冥に光を投ずる許りでなく、吾々の將來をも照し、隨つて實踐的行動の指針となる人間の社會生活に關する一種の宇宙論を與へることを要求するものであるからである。

マルクスの經濟學は、斯くの如き包括的な思想體系の主要な一肢體を成すものであるが故に、夫は、種々様々の觀方や解釋的企てとなつて人々を惑亂した、彼の根本觀の曖昧多義矛盾の悉てを分ち持つてゐるのである。

マルクスの全體系を支配し、結局統一的觀方を不可能ならしめてゐる此の重大な矛盾は、理想主義的な、ヘーゲル流の精神哲學の影響に基づく思惟動機と、純認識意志からと云ふよりは、寧ろ政治的且つ煽動的な理由から彼の心に差し迫つて來た唯物論的自然科學的な意圖との不自然な結合である。ブレンゲは、その著『マルクスとヘーゲル』に於て述べて曰はく、マルクスがヘーゲルを去つて共產主義及び唯物論へ轉換したと云ふことは、全てが極めて皮相に成し遂げられたに過ぎない、従つてマルクスの殆ど全ての學說に於て、例へば、彼の歴史哲學の構造に於ても彼の倫理學の一元論的特徴に於ても、ヘーゲル流の思想の影響は依然として著しく持續して居るので、唯物論的根本觀や故意に自然科學的に向けられた研究方法が眼立つのは、彼の學說の實質的内容と云ふよりは寧ろ術語や外形に影響し得た表装の所爲と見做す外はないと。斯様な方法上の二元論はマルクスの經濟學にも及んでゐる。彼が追進する所のものは決して統一的方法ではない。彼の



價值論に於ても、價值現象及び價格現象の單に因果的、自然法的説明を目指す所の、リカルド流思想の祖述として取り容れられた一種の自然科学的觀方と價值現象及び價格現象を分拆してその社會的内容に推究し、一種の「社會的」觀察方法を移入する、リカルドとは正反對に立つ文化科學的傾向とが相反齟してゐる。マルクス價值論の曖昧と重大な疑義とは此の二元論に基づくのであるが、併しマルクス價值論獨得の魅力、つまり、二個の異質的な課題をば一舉にして解決する一種の學說の持つあの廣大な視野と表見的な頼しさも亦此處に存するのである。所で、マルクスの一般的學說に於ては唯物論的——自然主義的内容がマルクスの主觀的な意嚮に由つて權勢を恣にし、文化科學的内容に對しては、僅に木偶坊的な役割を割り振つたに過ぎないに反して、マルクスの經濟學に於ては、吾々は全然正反對の光景に接するのである。成程、資本論の序文に従へば、資本論の内容は、自然の行程を觀察する物理學者の類推に倣つて獲得せられた「資本主義的生

産の自然法則」即ち「近代社會の運動法則」を記述することにある筈であらうが、吾々は、宛もその資本論に於て彼がその先蹤の自然科学的方法を斷へず辯駁し、批評し、之に對して彼の歴史的な、そして社會的な觀察方法を對抗せしめやうとするのを見るのである。従つて此の價值論に於て文化科學的動機の參加する部分は、マルクスの爾餘の學說に比して遙に意識的なものであり、従つて一層明瞭なものである。とは云へ、今斯かる文化科學的内容をば、マルクス價值論の特色として説明することを以て以下論述の課題とするとすれば、吾々は、此の文化科學的内容をばリカルドからマルクスに譲り渡されたあの別種な思想系統との纏れから救ひ出す爲に、人爲的な、然り幾分無理な抽象に依らねばならぬのである。マルクス流の諸概念に固有な曖昧、その變幻極りない多義は、惟ふに彼に意識せられなかつた方法上の二元論に基づくものであるが、夫が勢ひ斯くの如き類型化的な、恐らくは氣紛れとも見える解釋を必要ならしむるのである。私は、斯くの如



き道を辿つて果してマルクス價值論の爲に、今日の出題として見ても猶ほ且つ興味ある所の一新生面を獲得打開することが出来るか否かを試みて見度いと思ふ。之本論の持つ第一の制約である。

所が、更に最ふ一段の制約が必要である。尤も之は、吾々がマルクスと彼の國民經濟學上の諸先輩との關係を一瞥すれば一番良く判るのであるが。

從來人は、大抵マルクス流の方法を最も明快に表はすものと云へば、マルクスが自らベッチイ以來の悉ての經濟學を一括して名附けた、彼に従へば、資本家的生産關係を探索して竟にリカルドに於て燦然たる完成を見た所の古典派國民經濟學に對する反對を擧げて來た。縦んば、マルクスが、彼も『競争の外観』に對して此の『内面的關係』をば勞働價值論を援用して討究しやうとする點では、古典派經濟學と共鳴して單にその祖述者に過ぎないと感じたとしても、他の關係からすれば、彼は古典派の經濟學者とは嚴格な反對に立つてゐるのである。即ち、彼等

は、その範疇をば人間經濟の永遠なる自然形式と見做したのであるが、實は是等の範疇は、歴史的に條件附けられた、經濟的發展の一定の歴史的發展段階に特有な諸形式を表現するに過ぎないのである。

此のマルクスの立場は、歴史的な經濟制度が持つ、個性的な、社會組織の遷り行く状態に依存せる性質を強調するものであつて、成程マルクスの概念形成方法にとつて可成り重要なものであるに相違ないが、併し夫は彼の方法上の處置を完全に竭すものでもなければ、彼にとつて唯一つ典型的なものでもない。斯くの如き觀方は、ハムマツヘルが述べてゐる通り(註)、寧ろ凡ての社會主義的論客には多少とも特有なものでなければならなかつた。謂ふに、彼等の現存制度に對する批評は、斯くの如き制度の單に相對的な、可變的な性質の表象と不可分離なものでなければならなかつたからである。ロードベルトスも此の立場を代表したとしてワグナーやデイーツェルは、今日では既に斯學の共有財産となつてゐる、彼等の



經濟—技術的範疇と歴史—法律的範疇との區別に就てはマルクスよりは寧ろロードベルトスに負ふ所が多かつたのである。

(註) エミール・ハムマツヘル「マルキシズムの哲學的經濟學的體系」四二一頁。

併しマルクスの方法の遙に重要な一要素は、前段に述べた古典學派に對する反對の爲に稍ともすれば看過され易いが、夫は今度マルクスと「俗流經濟學」との關係を見れば明になる。マルクスの所謂「俗流經濟學」と云ふのは、先づセイに始まり、次いで特にリカルド學派の批判と分拆から出發して、勞働價值説を否定し、資本主義的競争現象の一種の體系化を以て甘んずる論客等のことである。彼等は價格を利子、勞賃、地代の諸成分から成るとし、更にその利子、勞賃、地代をばマルクスが口を極めて罵倒した「三位一體的」公式に従つて三生産要素、土地、勞働及び素材的實體から見て機械、原料等としての資本の應用の結果として捕捉しやうとするのである。「資本——利子、土地——地代、勞働——勞賃の公

式に於て、資本、土地、勞働は、夫々夫等のもの、生産物、果實としての利子、地代、勞賃の源泉として現はれる。前者は原因で、後者は結果である。彼方は起源で此方は作用である。而もその因たり果たるや各個の源泉が、夫々彼等から排出されたもの、生産されたものとして彼等の産物に結び附いてゐるのである」(註二)。故に、左様な觀方に於ては利子、勞賃及地代は自然的過程の結果として、つまり、その性質上、その根源たる技術的生産要素の異ると同じく夫々異つてゐる技術的餘剰として現はれるのである。従つて是等のものは、彼等の社會的な形式的規制ではなく、自然的勞働行程に於ける彼等の職能に着目して捕捉されるものである。「資本であることは、勞働手段の自然形式として現はれる。併し一般に純物的な、且つ一般に勞働行程に於ける彼等の職能に淵源する性質として現はれる。資本と産出せられた生産手段とは斯くの如く同一なるもの、表現となり、同様に土地と私有財産即ち獨占化された土地とは同一物の表現となる。生れ



ながらにして資本たる労働手段は、土地がその儘地代の源泉になる如くにその儘利潤の源泉となる」(註二)。

(註一) マルクス「資本論」第三卷第二冊、三五二頁。

(註二) 同書、三六〇頁。

斯くの如き外面的關係に着目すれば、諸々の収入は重農主義流にその根源たる技術的生産行程の實質的餘剰と見做されるので、夫が爲に人々は竟に物の世界に於ける因果關係の觀方を超脱し得なかつたのであるが、マルクスは今や斯くの如き外面的關係に對して彼の「社會的」立場なるものを主張する。上段に述べた經濟學の諸範疇は歴史的であらねばならぬと云ふ反對よりは、茲に要求された、經濟學の諸範疇は社會的であらねばならぬ、此の範疇に於ては、物と物との關係及び連絡でなく人と人との關係及び連絡、換言すれば、社會的關係が表現されねばならぬと云ふ反對の方が遙に重要である。マルクスが此の社會的範疇の要求を引提

げて征服しやうとするものは、實に此の社會的關係の物化であつて、經濟的生活過程を一の自然的物關係に物化し此の生活過程を人間相互の社會的關係、連絡と見ざる所のものである。

斯の如き「社會的」範疇の要求は、如何にも嚮に歴史的の内容の諸概念に着目して擧げられた範疇と關聯してゐるに相違ないが、併し決して夫と同一物ではない。之は強調して置く必要がある、蓋し、今日の觀方は、「社會的」なる言葉と「歴史—法律的」なる言葉とを同義語として之と「自然的」範疇とを對立せしめており、従つて世人は從來マルクスを解説するに當つても歴史的要素と社會的要素とを區別しなかつたからである。併し乍ら、マルクスの見解を以てすれば、後者は後段に詳述する通り、特定の對象群の客觀的標識ではなく、社會科學一般の一定の方法的出發點を意味するのである。「自然的」範疇と雖も夫が社會科學的概念である以上は、夫も社會的であるべき諸條件を充たさねばならぬ。マルクスが此の關係



を如何に解したかは次の文句に由つて覗はれる。「従つて生産に就て云々する場合は、夫は常に一定の社會的發展段階に於ける生産の謂ひである——即ち社會的個人の生産の謂ひである。従つて一般に生産に就て論じやうとすれば、吾々は或は歴史的發展過程をばその種々なる段階に亘つて追究せねばならないか或は豫め、吾々は歴史上一定の時代を取り扱ふのであると斷つて置かねばならぬかの如くである。併し乍、生産の凡ての時代は一定の標識を共有してゐる、即ち共通の規制を持つてゐるのである。生産一般と云ふことは一個の抽象であるが、生産が事實上共通なものを示す以上理由ある抽象である」(註)。

(註) 「經濟學批判」序説第四頁、——猶ほ「資本論」第一卷一三一——一三二頁參照。

併し、マルクスが據つて以て自ら古典學派の完成者を以て任じ、特に「俗流經濟學」に對する論戰に於て完成した此の「社會的」なる立脚點から、嘗て古典派學者の間でも決して展開されたことのなかつた全然新しい觀方が經濟學に入つて來

た。斯くてマルクスに於ては價值概念は夫が社會的諸關係の此の如き解剖に役立つ限りに於て全然別個の意義を取得する。茲に吾々は吾々の主題とする所のものに就て一層詳密なる制約を得ることになる。即ち經濟學の諸範疇は、社會的關係の表現であるべきであると云ふマルクスの根本的立場は何を意味するであらうか又此の立場は彼の價值論に如何に影響するであらうか、本書では獨り斯様な特殊な問題のみを取り扱ふ積である。マルクス價值論の全體を記述することは不可能である、吾々は單に個々の要素を取り出すに過ぎない、而も夫丈を引き離して一の統一的思想關係に纏めるのであるが、之は決してマルクス價值論を忠實に模寫する爲ではない、之に由つて、マルクス價值論の全景では稍くもすると冷遇されたり看過されたりする或一つの特徴を判つきりさせ度いと思ふに過ぎないのである。



## 第一章 質的價值問題

### 第一節 社會的生產關係

經濟學の諸範疇は社會的諸關係の表現であらねばならぬとするマルクスの要求は、社會なる概念を前提としてゐる。然らば、茲に云ふマルクスの社會とは如何なるものであらうか。「生産に於て人間は常に自然に作きかくる許りでなく、人間相互に作きかくる。人間は一定の仕方では協働し、彼等の活動を相互に交換して始めて生産する。生産するが爲には彼等は相互に一の連絡及び關係を結び、生産は此の社會的連絡及び關係内に於て始めて營まれるのである……」。此の生産關係の全體が、人が呼んで社會的關係、社會と爲す所のものを形成するのである」(註)。そこで、社會的生產關係なる基礎的概念に打衝かつた譯であるが、吾々は、

此の概念に就いて論ずる場合も範圍を限定して、此の概念を唯物史觀の中心點たらしむる所の、即ち一方では生産關係なるものを勞働の生産力の發達に由つて條件せられるものとして現はし、他方では、同じ生産關係を歴史的生活の終極の決定原因として現はす所の關係は全然之を問題にしない積りである。今は單に此の社會的生產關係なる概念は何を意味するか、夫と價值概念とは如何なる關係にあるかを論究すれば足りるのである。

(註) マルクス「賃勞働と資本」二五頁

先づ形式關係としては社會的生產關係は、自己の同胞を客體としてではなく、自由なる目的設定的主體として係はり合ふ人間間の關係である。随つて一の社會的生產關係として現はれるものは、決して物財間の、又は外界の對象としての人間間の實在的——因果的關係ではなく、主體として見た人間間の一の觀念上の關係である。自由なる活動圈相互間の一定の相對的限定及び關係である。此の社會



的生產關係は形式的關係としては一種の法律關係の範疇に入れらるべきもので、實在的依存關係の範疇に入れらるべきものではない。此の人間を主體と見て（尤も此の人間を主體と観る觀方は經驗的人間の一般に因果的制限の假定と非常によく一致するのであるが）、人間を外界に屬する全ての客體の圏外に救ひ出す出發點には、人間及び人間の労働行為は爾餘の生産手段に比して何か全然特殊なものであるとする「人類靈長論的先入見」(註)が根を張つてゐるのであつて、之が更に布衍せられると、マルクスの、社會的分拆を以てして始めて人間労働は價值の根源であると云ふ命題になるのである。之に反して、自然科学的——技術的立脚點には、ベッチイの「労働は富の父にして土地は富の母なり」と云ふ命題が當て嵌まるのである。

(註) マリアンヌ・ウエーバー「フイヒテの社會主義とマルクスの學說」八〇頁

所で、然らば、マルクスの「社會的生產關係」とは眞に何を意味するのであらう

か。茲に注意すべきことは、純技術的生產行程即ち労働行程と夫との相違を明に呑み込んで置くことである。労働行程は畢竟次の要素に竭きる、即ち(一)合目的々労働、即ち労働自體と(二)労働對象と(三)労働手段之である。生産の物的條件たる原料、補助原料、道具、之を要するに生産手段は、此の場合純技術的役割しか演じてゐない。かど云つて、労働行程に於ける人間の協働を見ても、縦んば夫が單純な協業或は分業であつた所が、純然たる技術界の問題であることに變りはない。全部に對する部分として、即ち一の複雑な構造を有する有機體として現はれる分勞者相互の關係は未だ決して社會的生產關係ではない。従つて、吾々が據つて以て此の生産行程を社會的過程と觀得る着眼點は個人をば一の全體の爲に協働する分勞者として、即ち使用價值ある生産物として組み合はする關係に由つては形成され得ない。夫こそ慥かアダムスミスの分勞の觀方であつて、その見解に従へば、結局社會内の分勞も工場内の分勞も區別なく、後者は前者の小天地に過ぎな



いと云ふことになつたのである。吾々が此の分勞働的生產行程の社會的意義を掴み得るのは、技術的分化と併行して行はれる實在的、法律的編成を觀察する場合、換言すれば、生産手段や土地の如き生産の物的條件の社會的成員間に於ける分配や、さうしたことに起因する個々の生産要因の特殊なる社會的機能に着目する場合に始めて可能である。勞働、生産手段及び土地は、是等のものが、技術的勞働行程に於て演ずる銘々の役割から見ればさうは見へないのであるが、之をその社會的意義から見た時に、彼等は一定の社會階級の間に排他的所有として分配せられたものとして、即ち賃備勞働、資本及び土地所有として、そして同時に生産の一定の社會的組織の基礎として現はれるのである。斯くて吾々は今や此の概念を規定する基礎を得た譯である、即ち社會的生產關係とは分勞働的生產行程に、加せる人間の間、に、勞働行程の技術的諸條件の實在的、法律的分配を通じて、成立する特殊の社會關係なのである。

社會的生產關係を靜態に於て觀察するならば、夫は生産の物的條件に係はる特定の所有の分配を意味するに過ぎない。併し乍經濟的範疇の特質を社會的再生産行程の流動から引き出すのがマルクス流の觀察方法の特徴である(註二)。随つて一定の分配關係は生産關係に對應するのである。然り分配關係は生産關係の反面に外ならないのである。「所謂分配關係なるものは、生産行程及び人間が彼等の生活の再生産行程に於て相互に結ぶ諸關係の、歴史的に一定の、特に社會的なる諸形態に對應し、之から發生するものである。斯様な分配關係の歴史的特徴は又生産關係の歴史的特徴である。何故なら分配關係は生産關係の一面を表現するに過ぎないからである」(註三)分配關係が果して右の如く生産關係に根ざしてゐるものとすれば、分配關係は夫許りでなく生産關係の最も重要にして且つ顯著なる要素をさへ表現してゐる譯である。人間が生産に於て相互に係はり合ふ仕方なり方法なりは、人間が生産物を分配する仕方なり方法なりに現はれてゐる。マルクスは



曰ふ「リカアドは、近代的生産をその一定の社會的組織に於て捉へるのが目的であつたし、且つ今日でも生産に關する卓越した經濟學者であればこそ、生産ではなく、分配が近代經濟學の眞の論題であることを宣言してゐるのである」と。

(註一) カウツキー「ノイエツァイト」第四年(一八八六年)五〇頁

(註二) マルクス「資本論」第三卷第二册四二〇頁

之を要するにマルクスは、經濟學の範疇は、社會的生産關係の理論的表現であることを主張するものである。併し、社會的生産關係は主體としての人間と人間との間に於ける關係である。人間が分勞的生産行程に於て法律主體として相互に係はり合ひ、彼等の自由なる活動圏が相互に制限せられ、條件せられる方法、仕方である。生産内に於けるかゝる觀念的關係は、此の生産關係を別個の名稱で現はしたに過ぎぬ分配關係に於て夫が特定の表現を含み且つ持つてゐるのである(註)。

(註) マルクス「資本論」第三卷第二册五五頁

## 第二節 社會的生産關係と法律關係

然らば社會的生産關係の分解剖は、實は既存の、經濟生活を規律する法律關係に歸着するかに見ゆる。社會的組織の方法、生産協同體の本質を洞察するが爲には、吾々は唯或一定の時代に於て經濟生活を規律する、實際に存在する成文法、慣習法その他の法規を記録すれば足りるであらう。果して之がマルクスの見解であるならば、マルクスは、如何なる社會的觀察もすべて外面的規律なる條件の下に立たねばならぬとするシユタムラーの要請と正に五十歩百歩であらう。然らば、社會的研究なるものは、實際最早シユタムラーが社會經濟現象の體系化に於て要領を示した如く(註)、經濟現象を分類的にそして數量統計的に取り扱ふより外はなからう。



(註) シュタムラー「經濟と法律」二五五頁

所がマルクスは、まさかシュタムラーの斯かる要求の驥尾に附して後塵を拜しないまでも、シュタムラーがマルクスを批難してゐる如く、或は中途に低迷してゐるのかと思ひの外、事實はシュタムラーを遙かに踰越してゐるのである。法律關係と生産關係とは同一事ではない、従つて社會的分拆は純形式的法律關係の背後により深く横はつてゐる社會的關係の一層を求め出すべきであると云ふのが、資本主義的生産行程に關するマルクスの社會的分拆全體が依存してゐる彼の最も特徴ある見識の一つである。マルクスが嘗つてブルードンを駁撃したのも此の意味からである。即ち「元來ブルードンが問題にしたのは、既存の近代市民的財産であつた。抑も近代市民的財産とは何かと云ふ問題は、此の財産關係の全體をその法律的表现に着目して意志關係と見ず、その實質的内容に着目して生産關係と觀る經濟學の批評的分拆より以外には答へる術のあらう筈はなかつたのだ」(註)

(註) マルクス「哲學の貧困」二六頁

夫は必しも常にさうあつた譯ではない。マルクスは之(資本主義的社會組織)と他の歴史上の社會組織、例へば、原始共產主義的協同團體とか中世の人身的隷屬關係とかよく空想される「共同の生産手段を以て勞働し、彼等の個人的勞働をば意識的に社會的勞働として」支出する一種の「自由なる人間の結合」とかとの相違を例證してゐるが、悉べて是等の社會的組織と市民的、商品生産の社會と截然と分つ特徴は、夫と之との間にその他にどんな相違があつても、是等の社會的組織では、生産行程に於ける人間相互の關係、彼等の活動圏の制限、生産の結果に對する即ち分配に對する參與に於て現れる上級及び下級の關係が意識的に規律せられたものとして現はれると云ふことである。生産に於ける個人の社會的地位は、是等の社會的組織に於ては、法律に依つて直接規定されたのである。——夫が、商品生産の、「市民的」社會では全然趣を異にしてゐる。フランス大革命とその影



響に由つて嘗つて封建的生産方法に於て經濟生活の零碎なる點に至るまで支配した複雑極まる法律形態が撤廢されて了つた。新しい市民的社會の組織が據つて以て立つ基礎的法制は、私有財産及び之を補足する人身の自由となつた。併し之と同時に苟も人間の社會的共存を直接規律することは悉べて止揚せられて了つた。法律に由つて規定され、項末な點に至るまで容喙した秩序に代つて、間接の規律シユタムラーの剴切な表現を藉れば、『長い綱』とする規律が入れ替つた。社會的組織は無數の原子に、各自の利害關係を標準に作らく、無數の私の個別意志に分裂せられ、その意志相互間の結合は或る先驗的に定立せられた計劃に従つてされずして、私の、自己の利益に奉仕せるオシユベレドユルク交タウシュと契約とに由つて作出せられるのである。自由と私有財産と云ふ純形式的な、極く廣汎な範圍を規定する法律原理は個人の特種な利害が夫に對して反應する仕方、方法に由つて始めて具體的内容を與へられるのである。斯様な法律秩序の非有機的な性質こそは、マルクス

が、その充實を以て社會科學としての理論的經濟學特有の課題範圍なりと限定しやうと企てた空隙なのである。

私有財産及び人身の自由と云ふ純粹に抽象的な、何等積極的な秩序の原則を包含せぬ法律原理は私的な、銘々の變動常なき利害に由つて支配せられる個人意志が、夥しい契約關係を通じて此の法律原理に與ゆる積極的な形式に由つて補足せられるのである。是等の私的交渉は、種々なる法律上の契約形式で行はれるのであるが、夫が私有財産と人身の自由の普遍的法規の應用問題として觀察せられる時は、夫は法律的意志關係として即ち法律關係として現はれる。シユタムラーが、凡て社會の觀察に當つて諸現象を外的に規律せられたものとして見る事を要求するのは斯うした仕方に基づくのである。併し斯くの如き觀察方法は、文字通りに形式的であつて、言葉の嚴密なる意味に於ける法律的な現象(註)を竭してゐない。寧ろ消極的、抽象的法律秩序の埒内に於ける個人意志の事實上の活動に由つ



て人間の諸關係に對する積極的規律は與へられてゐるのである。よし、夫は、意識的には設定されなくとも、事實上、中世に於ける生産行程の公共的—法的秩序と類似した方法で、抽象的法律規範を滑り出る一定の社會關係を包攝してゐるのである。

(註) シュバンのシュタムラーに對する批評「經濟と社會」百五十三頁を参照され度い。即ち曰はく、「……法律關係及び規律關係の實現(實行)と云ふ特質に開放せられるを要する廣大な活躍圈内には恒にその認識は原則上法律關係の認識であり得ない現象がある。謂ふに、斯くの如き認識は、法律關係の實現及びその實現の特質の認識であるからである」と。併し、さう云ふことからシュバンの、斯くの如き事實の經驗に對する唯一可能の認識方法としては今や因果的認識方法あるのみであらうとの結論は出て來ない。

此の「事實上の法律」は、誠に剴切な名稱であるが、上述の如く抽象的、非有機的法律秩序の範圍内に於て發達するもので、之ぞマルクスが呼んで社會的生產關係となす所のものである。随つて、法律關係と社會的生產關係とは自由競争の市

民的社會内では別々なものである。二者は同一の社會現象を異つた見方に基づいて包攝するもので即ち前者は社會現象を抽象的規範の應用事件として後者は具體的な法律關係として、一定の、私的利害の活動に由つて設定される社會的關係として包攝するのである。

(註) カルネル「法制的社會的機能」三六頁

假令本書に於ては獨りマルクスの思想世界からの或る特別な截り抜きが問題であり、即ちマルクスが夫の「經濟的下層建築」を捕捉する爲に用ひた方法上の措置が専ら眼目であり、従つて吾々は苟も唯物史觀に觸れる問題は一切不問に附する積りであつても、法律關係と生産關係との差異は茲に端なくも簡單乍ら唯物史觀に關する一論争に觸れる契機を與へた。論争とは之を要するに、マルクスに在つては、「經濟的下層建築」の構造に於て既に如何なる程度まで法制的要素が含まれてゐるか、又吾々の觀方を以てして、「法制的上層建築」の理論に對する矛盾は



起らないかどうかの問題である。勿論必しも明快ではないが、生産關係の概念には技術的なるものを超越する法律的内容が存在する、生産關係なるものは「同時に既に一定の所有關係を包括してゐる」(註二)と云ふハムマツヘルの解釋に對してはディールが右のハムマツヘルの著作の批評に於て發表した他の見解が在る、即ち「果してマルクスが眞に生産關係を所有關係と同一視したとすれば、全部の統一は、余は之を彼の歴史哲學の特徴と云ひ度いのであるが、臺なしになるであらう。然らば全く全社會生活は一の統一的原理に歸着せしめられずして、二個の、技術的原理と法律的原理とに歸着せしめられる——果して右の如くならば、次の様な疑問が起らざるを得ない。技術と相並んで又最終の決定要因たるべき此の所有——此の所有は然らば如何にして發生したのであるか」(註三)と。吾々のマルクス觀は兩者何れにも與せず、中間の地位を占むるが故に、孰れの見解とも相觸れてゐる。技術は依然終極の決定要因である、蓋し社會の進歩、社會的生產關係の

發達は、夫が發達に懸つてゐるからである。その限りに於ては、夫は「必至の、人間の意志から獨立した」生産關係である。併し生産關係そのものは社會的生活の一定の形態として技術的基礎とは嚴密に區別せられねばならぬ、夫は社會的範疇として一定の法律關係を包含してゐるのである。併し上述の意味に於ける法律關係は又、社會の意識に上つて、經濟生活を規律する、一の法律體系に綜合せられた法律規範としての狹義の法律關係とは嚴密に區別せられねばならぬ。之ぞマルクスが「法制的上層建築」と見做した所のものである。「商品として財貨を相互に係はらしむるが爲には商品庇護者は相互に自己の意志を自己の財貨に宿らしめてゐる人間として振舞はねばならぬ。その結果甲は乙の意志と相合致して始めて、即ち各人は兩人に共通な意志活動を通じて始めて、自己のものを譲り渡して他人の商品を獲得することゝなる。故に彼等は交互に私有者と認めらるゝ事が必要である。此の法律關係は、契約はその形式であるが、合法的であると否とを問



はず、經濟關係が反射されてゐる意志關係である。此の法律—意志關係の内容は既に經濟的關係自體に由つて與へられてゐるのである』(註三)。従つて此の法律關係と生産關係との分離は、マルクスの法制的上層建築論が據つて以て立つ所のものであり、従つて兩者は法律關係として形式上同様なる性質を有するに不拘、吾々は二個の峻別せらるゝ現象複合體として論せねばならぬのである。

(註一) ハムマツヘル「マルクス主義の哲學的—經濟的體系」一六一—一六六頁

(註二) コンラッド年報第四十卷一一—一二頁

(註三) マルクス「資本論」第一卷五〇—五一頁。因に資本論第三卷三二八頁「是等の經濟上の取引が参加者の意志行動として、彼等の共通な意志の表現として、そして個々の當事者に對して國家機關に由つて強制せられ得る契約として現はれる所の法律的形式は單なる形式としては斯くの如き内容を決定することは不可能である。夫は此の如き内容を表現するのみである」と云ふのと比較参照せられ度

50

### 第三節 社會的生產關係としての勞動關係

マルクスが經濟學の諸範疇に於て社會的生產關係なるものを表現しやうとしてゐることは既に述べた。尤も、夫は、形式的構造からすれば、法律主體としての人間と人間との關係、社會的關係として現はれるが、實質的には、社會を規律する抽象的法規の適用事項としての法律關係とは異なる所の社會的生產關係である。斯くて吾々は、吾人をしてマルクス流價值概念の構造を明察せしむる要素を握つた譯である。何故と云ふに、價值概念は單に斯くの如き一般的方法上の根本思想の一の、併し最も重要な適用を示すに過ぎないからである。

價值論ではマルクスは古典派經濟學並に此の學派に由つて慣用された使用價值と交換價值との對立から始めた。併し、此の、夫々異つた説明を要する二個の經驗的現象の相違としての對立は、マルクスの見解を以てすれば、觀察方法の對立に歸着するのである。斯くの如く、從來人が物自體に置いてゐた對立を觀方、方法の對立に轉化した所に、マルクスが竟に完全にその羈絆から脱し得なかつた獨



逸理想主義哲學の純粹な後裔としての彼の面目が躍如としてゐる。故に、勿論夫にはマルクス自らも動機を與へたけれども、マルクスの價值論を單にリカルド流價值學說の祖述にしてより精巧なる完成に過ぎぬと見るならば、マルクス價值論に對する正鵠なる着眼點を擱むことは出來ない。若しマルクスが自らリカルドの祖述者にして完成者を以て任じたとしても、夫は、リカルドの概念なり、範疇なりにマルクス獨得の生命を填め込んだ所の一のマルクス流に解釋されたリカルドの祖述者であり、完成者であると云ふに外ならない。リカルドとマルクスの間には寧ろ獨逸流理想主義哲學が介在してゐるのである。リカルドの思索は、純自然科學的—發生的であるに反して、マルクスの價值論は自然主義的表装はあつても、社會的生活的方法的觀方に見逃す可からざる轉換を反映してゐる。

價值論一般の有する課題的方法的把握に右の如き轉換のある事を見るならば、マルクス價值論には、マルクス價值論の特徴を理解するが爲には必ず判然吞み込

んで置かねばならぬ先驗的要素が含まれてゐることは明かであらう。吾々は價值概念的方法的構造に關する諸問題を一括して質的價值問題として、交換價值量の經驗的問題を中心とする量的價值問題と對立せしむることが出来る。マルクス自ら斯かる質的及び量的價值問題の分離に就てその歸趨を示したとは云へ、既に「資本論」に於て之を明瞭に實行してゐたとは云ひ難い。却つて、價值に關する資本論最初の諸章の曖昧は、實に斯くの如き二個の全然相違した、全然違つた手段を以て解決せらるべき課題を全で無雜作に取り扱つた態度に歸着せしめらるゝ如くである。是等の諸章では、後に詳述する通り一は質的價值問題を目指し、一は量的價值問題を目指す所の先驗的構造と經驗的證明とが相錯雜してゐる。此の二問を區別して論ずることは夥しい曖昧を闡明し、就中資本論第一卷と第三卷との關係の理解に資するであらう。

吾々は先づマルクスの意味に於ける質的價值問題を提出する、即ち方法上の出



發點、言はゞ價值論の先驗的なものを問題にする。即ち交換行程は、縦し夫が如何なる法律上の契約形式を以て遂げられやうとも、私有財産と人身の自由の上に築かれた分勞的社會の内部に於ては、個人經濟の點在的な、偶然的な補足と云ふより以上の意味を有する。交換なるものが合律的社會過程となる、即ち社會的再生産行程の必要不可欠の要素となる。「校内銀行に於けるペン軸と郵便切手の偶然な交換」(註)でなく、此の如く、原子に分裂せる社會の職能となれる鏈環としての交換にして始めて價值論の對象となることが出来るのである。蓋し、斯様な、生産の諸條件と結び附いた交換に依つて始めて客觀的合律性が貫かれるからである。

(註) ヒルファディング「ノイエ・ツァイト」第二十三年第一冊一〇一頁

この交換に入り込む財貨は、先づその感覺的—自然的方面から觀察すれば、使用價值として、交換に於て一定の、彼等の自然の性質に對應する割合を以て相互

に置き替へられる有用なる財貨として現はれる。従つて交換價值關係は先づ「使用價值が相互に交換せられ得る量的關係」として現はれる。今若し交換價值關係を以て單に使用價值の斯くの如き交換に過ぎずとするならば、此の關係を以ては享益する者と生産物間の感覺的—自然的關係が會得されるのみで、交換と共に設定される法律主體としての人間と人間との間の社會的關係は捕捉され難い。交換せらるゝ財貨の使用價值しか觀ない主觀的價值論は、竟に原因、結果の純物的關係の罅を脱せず、交換に於ては、單に各個の心理學的主體の欲望満足状態に於ける盈虚或は昂進を見るのみである。随つて主觀的價值學説は、交換價值關係をば社會的生產關係に非ずして自然的物的關係と解するのである。之に對して、マルクスは明快に自己の立場を詳述して曰はく「富の社會的形式が如何にあつても、使用價值は常に富の、斯かる形式に對して初めから無關心なる内容を形成する。人は小麥を味つても、何人が之を作つたのか、ロシアの農奴か、フランスの分割



地農か、或はイギリスの資本家かは判らない。假令夫が社會的需要の對象であり、従つて社會的關聯あるとするも、使用價值なるものは、毫も社會的生產關係を表現しない。使用價值は、斯くの如き經濟學的形式規制に對する無關心に於て、換言すれば、使用價值は使用價值として、經濟學の觀察圏外に在るのである』(註)。

尤もマルクスは使用價值をば、交換の經濟的解剖の目的、目標としてこそ拒みもするが、決して經濟的因果觀察一般の埒外に排斥するものではない。

(註) マルクス「經濟學批判」三頁

故に主觀的價值學說の拒否は、マルクスの立場からすれば、何等「否定」ではない、決して與へられたる事實のより正しい解剖の問題ではない。彼は抑々から全然異つた立場を採つてゐる。即ち交換關係を心理學的、主體間の物的關係として、なく、法律主體間の社會關係として把握する根本的に別個の觀察方法を要求するのである。『……商品形態と商品形態が現はれる勞働生産物の價值關係は勞

働生産物の物理的性質及び夫から發生する物的關係とは絶對に何等の關係もない』。

併し乍、どうも物財相互の量的關係として現はれる交換關係を如何にして社會的生產關係として、人間相互の關係として觀ることが出来るか。茲に愈々吾々は價值の尺度としての勞働の原理中に於ける先驗的なものを明かにすべき場合に立ち至つた。財貨、使用價值は先づ甘美、堅硬、柔軟等の客觀的特質を具へた自然物であるに過ぎない。併し夫が人間勞働の生産物である以上は、夫は「感覺的にして同時に超感覺的な」物である。超感覺的とは、一般に人間が意志する主體として客觀的な感覺界に對立すると云ふが如き意味である。今や種々様々に自然主義的覆面を施してマルクスに現はれ、彼をしてリカルドの勞働價值說に全然新規にして獨得の生命を盛らしむる所のものは、實に斯くの如き獨自の態度、獨逸理想主義が哲學的反省に由つて物的自然に對して意志する主體に歸屬せしめた夫



の獨得の價值強調である。勞働生産物としての使用價值内には人格の一片が具體化されてゐる。斯くの如き使用價值が如何なる錯雜した經路を経て如何なる人の所有に注ぎ入るかを問はず、その人は、之に由つて、間接に人間活動の生産物を従つて人間自身をも支配するものである。(註)

(註) マルクスが物質的生産の勞働を倫理的な人格の吸收と解してゐたことは次の文章を見れば明かである、即ち資本論第一卷四九三頁に曰はく「勞働の集約度と生産力とが與へられてゐるとして、勞働が社會の働き得る成員の間に一樣に分配せらるればせられる程、各人の自由なる精神的そして社會的活動に奪はれる時間分は愈々少くなり社會的勞働日 (Arbeitsstag) 中物質的生産に必要な部分は、従つて益々大きくなる。……資本主義的社會に於ては一階級の自由なる時間は大衆の生存時間を残らず勞働時間に轉化することに由つて生産せられる」と。(マルクスの剩餘價值學說史第三卷三〇五頁にも同様のことが述べてある)。

吾々は、以下、前述の、經濟學の諸範疇に於て社會的生產關係を捕捉せんとする、マルクスの要求が之を交換價值の觀察に適用する時は直に價值の原則として

の勞働に達する所以に就て述べる。若し社會の法律意識の下に諸の利害の私的活動を通じて遂行せられ、實現せられる「事實上の法律關係」即ち交換に於て設定される具體的社會關係をば意識に齎すことが、一般に經濟關係觀察の原則であるならば、いつまでも商品體の目まぐるしい多様性、感覺的外面に執着しては居れない。商品は使用價值として廻はさうが轉がさうが自然の一片である。従つて使用價值としての商品は之を社會的意義に於て評價する事は出来ない。商品の唯一の特質が商品を社會的關係の負擔者並に表現として假想することを可能ならしめる。夫は商品の勞働生産物としての特質である。何故と云ふに、吾々が勞働生産物として見る時は最早消費の立場から見ず、生産の立場から見るので、物化せられた人間勞働として見るのである、従つて此の人間勞働が複雑なる循環行程中に於て嘗める運命は、實は、商品の背後に潜み、生産中に商品中に沈められた人格の運命に外ならぬのである。(註)



(註) ジュメルは『貨幣の哲學』四五七頁に於て曰はく「……労働に於て、人間の物質力と精神力、睿知と意志は、人間が是等の力を云はば靜止的並列に於て覗める限り是等の力には永劫不可能な統一性を獲得する。労働は、宛も水源の如く、是等の力が混和し是等の力の本質上の差別を生産物の無差別性に溶解し竭す統一的水流である」と。

之が經濟關係の魔術性に關するマルクスの基礎的敎理の内容であつて、その最も簡單なる基礎的形式は商品の魔術性であり、従つて簡單な交換價值關係の魔術性である。人間が物的生産行程に於て互に入り込む社會的關係は、具體的使用價値の交替に由つて物的諸關係の背後に隠れ、内在的労働關係の分拆に由つて始めて暴露せられ得るのである。「人間の社會的關係は、徐々に逆まの現象を呈する、即ち物財の社會的關係として現はれる」……「社會的生產關係が或る對象の形態を採り、その結果人間の労働に於ける關係が寧ろ物財が相互に又人間に對して作る關係として現はれると云ふことが陳腐自明に思はれるのは、全く日常生活の慣習に外ならない。」(註二)資本主義前の社會時代に於て、意識的な社會的規律或は

直接の人格的依存であつたものは、今や物財の交換運動の背後に隠れて了ひ、今や、物財は、競争の機械的撥條に由つて自由自在に操られて一切の人間關係から全く解放され一個獨特な、彼等の自然の性質に立脚した價値的存在を營むかの如き觀がある。此の如き、競争及び交換關係の自然主義的觀方こそ、即ち商品交換を以て機械論的類推に従つて空間に於ける物的商品體の運動としか考へず(註二)、人間はその抽象的、社會的平等なる點を以て受動的傍觀者の地位に墮されてゐる觀方こそマルクスが彼一流の魔術性説で征服しやうとする所のものである。マルクスは斯かる完成した商品の流通界から吾々を連れ出して生産界に案内して呉れる、工場なり仕事場なりに來て見ると吾々は現に人間が自らその人格を生産物に沈潜するのを目撃するのである。そして今や一步流通界に踏み込んだ生産物は最早決して自然物ではない。徹頭徹尾人造物である。即ち生ける労働の凝固せる存在である。夫は生命なく語るべき口無きも、自己の運命を鏡として、自己の直接



の生産者として自己の背後に立てる人間の運命を反映してゐるのである。斯くの如き生産行程と流通行程の統一的觀察に由つて商品の交換行程は無關心な自然的経過から脱して、換言すれば、社會の連帶的構造を無視して顧みぬ生産物の純物的な關係から脱して労働人格の社會的關係となる。

(註一) マルクス「經濟學批判」一〇一—一頁

(註二) 斯くの如き機械的觀方は更にシユムペーターに於て最後の完成を遂げたのである。

人々は、云ひ方こそ違ふが、此の、客觀的價值論就中労働價值論の超克こそカントの影響だと云ふ。謂ふにその人々は、カントに源を發して十九世紀初頭の獨逸國民經濟學を経て、つまりフォン・ゾーデンやフリーフェランドやロッツを経て竟にオーストリア學派に達した一列の歴史的展開を觀てゐるのである。ジムメルも、カントの哲學は、價值は物自體に附着せず、主觀が物自體に移した物の形式に過ぎないと云ふのであるから、その全體の調子から見て、主觀的價值論に一の

支點を與へたに相違ないことを指摘してゐる。是等の事實が、シユルツェ・ゲーヴアニッツをして經濟理論の問題に於ても、主觀的價值論か客觀的價值論か二者一を擇ぶべきものとして、カントかマルクスか嚴密に孰れを採るべきかと叫ばしめるに至つたのである(註)。併し乍らマルクスの經濟的諸範疇の魔術性の教理並に之に淵源する労働價值説の復活に對しても結局カントは教父であつたのである。何故かと云ふに、此の教理は、カントの實踐的理性の宗主説を前提し、此の實踐的理性を通じて人間及び人間の諸關係は一種無比特別の價值強調に由つて一切の自然から解放せらるゝからである。此の實踐的理性が、長期間に亘る歴史的過程に由つて媒介せられ、就中ヘーゲルに媒介せられて經濟的に改竄せられる事に由つて、カントの教理は、今や交換行程の物的關係の背後に人間の觀念上の社會的關係を暴露せんとするマルクスの要求の中に光り輝いてゐるのである。

(註) 「アールヒーズ・フユル・ソチアルポリテイク」二九一〇年第三〇卷八二八頁



## 第四節 抽象的—普遍的労働の概念

既に前段に述べた如く、マルクスは古典派經濟學に由つて傳承せられた使用價值及び交換價值の二元論を、獨逸の理想主義哲學に由つて展開せられた世界觀察の發生的方法と批評的方法の對立を以て綜合的に貫徹する事に由つて、經濟的生活過程の觀察方法の包括的二元論を高めた、即ち一の觀方は使用價值を指し自然的—物的關係を追求し、他の觀方は是等の物的關係の中に隠された社會的關係を探求する所の包括的二元論を高めたのである。之に由つて労働は、此の如き社會的分拆の手段となつて現はれた、と云ふのは、労働は、形成的造形的自然力としては使用價值に對し、並に人間人格の活動及び支出としては社會的規制に對し、二重の關係を獲得したからである。此の、一方では、具體的な有用な労働としての、即ち技術的労働としての、他方では、労働をして社會的依存關係の尺度たら

しめる抽象的—普遍的労働としての労働の二重性は、マルクスが特に力を入れて推敲し上げたものである。とは云ひ乍、丁度此の價值の實體としての抽象的—普遍的労働の理論は、マルクスの記述が實際與つて力があつたのではあるが、極めて重大な矛盾に逢着した。そして夫は二個の理由に基づく、即ち夫は質的及び量的價值問題の不充分な區別の外に、マルクスが簡潔な記述を用ひる爲に明瞭に區別することをしなかつた種々の還元形式が夫である。併しその外にも一つ事實上の曖昧がある、夫は、(前の第三—四頁で述べた所を参照され度いが)あの方法上の二元論が此の際統一的把握を不可能ならしめることである。従つて、此の概念に關する吾々の取扱は、意識的に一方的ではあるが、從來捨て、顧みられなかつた一面を此の概念の遷り易い内容から救ひ出す爲には已むを得ないことである。吾々は四個の本質的な點を區別する、即ち

## 一、抽象的普遍的労働



- 二、等一なる勞働
- 三、複雑なる勞働に對立する單純なる勞働
- 四、社會的に必要なる勞働

一、扱て、具體的有用なる勞働に對して抽象的—普遍的勞働とは何を意味するか。此の曖昧、不明の概念を解説するには、マルクスが此の概念を使用した目的から出發するを要するが、その場合、吾々にとつては、價值概念の—目的たる資本主義的經濟の社會的構造の解剖のみが眼目である以上、吾々は明に意識し乍一方的な態度を採らざるを得ない。マルクスにとつて抽象的—普遍的勞働の反對を爲すものは、勞働の技術的概念即ち有用な勞働である。此の勞働は、『目的、活動方法、對稱、手段、結果』に由つて規律せられてゐる（『資本論』第一卷八頁）、此の種々の有用なる勞働には一の社會的分勞が對應する。勞働は、夫が技術的役割にのみ終始して使用價值の形成者と觀られる限り、自然力と同じく、道具とし

ての資本と並んで同格の生産要素である、夫は人間的有機體の一自然力に過ぎない。所が勞働及びその生産物を社會的生產關係の土臺と見る限り即ち抽象的—普遍的勞働と見る限り、是等のものは全然別個の觀點の下に立つてゐるのである。然らば吾々は正直に具體的有用勞働概念の消極的抽象行爲換言すれば、此の概念の内容的貧弱化をやらねばならぬであらうか？ マルクスの種々なる文句に由つて觀ると宛も抽象的—普遍的勞働の下に單に凡ゆる具體的勞働に共通な、人間勞働力の支出と云ふ生理學的事實が考へられてゐるかに見える。即ち『生産的活動の規制を、従つて勞働の有用なる性質を除外すれば、後には、勞働は人間勞働力の一の支出であると云ふこと、例へば截つこと、織ることは質的には異つた生産的活動であつても、共に人間の頭腦、筋肉、神經等の生産的消費であつて、此の意味に於ては何方も人間勞働であると云ふことが残る。夫は唯人間勞働力を支出する二種の異つた形式であるに過ぎない。』抽象的—普遍的勞働の概念は諸家に由



つて此の如く一種の自然科学的事實の意味に於て理解されてゐた。之、種々なる労働を一種共通な自然科学的分母に、換言すれば、精神的労働をば筋肉労働に、或は凡ての労働を物理学上のエネルギー量に還元せんとする企圖が起つた所以である。所が、一方には、宛も此の一見唯物論的結論に基づいて、之は抽象的—普遍的労働を上の如く解すれば否應なしに達するのであるが、此の概念に對する異議が湧き上つた。そこでゲルラツハは典型的批判を下して曰はく、「凡て、(意識を)筋肉運動と神經運動とに還元しやうとする企ては……最初から不可能事として拒まねばならぬ……何故と云ふに、抑々人間の労働は常に意識を伴ひ、意識に由つて規制されてゐるが故に、人間の労働を筋肉運動及び神經運動に分解せんとするが如きは斷然拒まねばならぬ、蓋し假令さうしても斯様な分拆を以てしては到達し得ない最後のものが矢張残るであらうからである。」(註)

(註) ゲルラツハ「經濟的活動の條件に就て」四八—四九頁

併しこの抽象的—普遍的労働の概念なるものは斯様な、只管労働の自然的方面にのみ拘はれた一切の觀方を踰越する、蓋し、此の概念は經濟の社會的解剖に役に立たねばならぬからである。魔術性の章に於て、マルクスは商品ワエルトカラクテールの價值性の眞正の起源を求めて、斯くの如き價值性は使用價值からは發生しない、と云つて同じく價值決定の内容からも覺束ないとする、何故なれば、「縦し、有用な労働が如何に多種多様であつても、是等の労働が人間の有機體の作用であり、凡て斯くの如き作用が、その内容の如何に不拘、元來人間の頭腦、神經、筋肉、感官等の費消であつたことは一の生理學上の眞理であるからである」(註二)——故に、抽象的—普遍的労働を云々する場合は、労働の此の純生理學上の事實は考へられてゐないのである。所が斯様な労働の特殊な性質は、労働の社會的形態から來るのである。「最後に、人間が何等かの方法で相互の爲に働くや彼等の労働は忽ち社會的形態を取得するのである。」所でその労働の社會的形態と云ふのは生産關



係に顯はれる「事實上の法律關係」である。労働は、夫が一定の社會的形態を採る以上、個々の自然物、人間のその生理上の諸作用に於ける活動と解することは不可能である。寧ろ社會成員として従つて法律主體としての人間の活動として見て初めて理解することが出来る。労働の普遍性は、普遍的な生理學的内容のみしか攝取出来ぬ自然科学的類概念ではない、私的労働は、抽象的—普遍的労働として従つて社會的労働として即ち法律主體の活動の流露として現はれるのである。そして法律全體の概念がその先驗的普遍性に於て人間の經驗的個性的諸の規制に對して無關係である如く、之から引き出された抽象的—普遍的労働の概念からは、一切の具體的なる有用労働の個別的な差別は除外されるのである(註二)。

(註一) 尤もマルクスに於ては斯くの如き圈點はない。

(註二) シュトルツマン(「經濟學の目的」に於ける)は、マルクスに對する駁論の條に於て抽象的—普

遍的労働の概念に於ける此の「社會的」要素を看落してゐる。

二、マルクスは、商品生産内に於ける労働に對して抽象的—普遍的と云ふが如き特質の外に、一様性なる形態を附け加へてゐる。「先づ第一に労働の有する共通な單純性は、種々なる個人労働の一様性である、即ち、彼等の労働を一様なるものとして而も一切の労働を同質の労働に事實上還元することに由つて交互に係はらしむることである。各個人の労働は、夫が交換價值となつて現はれる限に於て、此の一様と云ふ社會的性質を持つており、そして個人の労働は、夫が他の總ての個人の労働と一様なるものとして係はらしめられた場合に限り、交換價值となつて現れる」(註一)。嚴格に云つたならば、茲にマルクスが商品生産社會の爲に想定した此の一様性と云ふ社會的形態は、量的價值問題の説明に侵入するかも知れぬが、抽象的—普遍的なると一様なるとの労働の二個の規制を揃へることに由つて初めて、マルクスの不正確な言葉の使用に由つて惹起された曖昧と混亂を



避け得られるのであるから、質的價值問題に於ても充分論せらるべきことである。何故ならば、用語上の若干の動搖に就て暫く問はなければ、マルクスの見解では労働の一樣性を意味するものは、一樣なる有機的基礎に起源する種々な人間労働の、共通な自然的性質ではなく、觀念的法的、一樣性即ち生産物に體現せられた労働が商品生産社會の交換方法を通じて即ち相等しき労働量に従つてする交換を通じて受け取る具體的社會形態である。此の労働の一樣性に對しては交換行程に於ける労働の、一樣なる妥當性が照應する。「併し、アリストテレスは商品價値の形式に於て、一切の人間労働が同等な人間労働として従つて一樣に妥當するものとして表現せられてゐることを、價值形體そのものからは看取することが出来なかつた。何故ならば、希臘社會は奴隸労働に依存して居り、従つて人間及び人間労働力の不平等を自然の基調としたからである。價值表現の秘密、即ち一切の労働が人間の労働一般であるが故に又ある以上、一切の労働は一樣であり一樣

に妥當すると云ふことは全く人間の平等の概念が既に充分確實なる國民判斷となつた時始めて闡明せられ得るものである」(註二)。

(註一) マルクス『經濟學批判』七頁

(註二) マルクス『資本論』第一卷二六頁

又特にエンゲルスの『反デューリング論』の一〇二頁倫理的平等思想の歴史的發展の條を参照され度い。曰はく『そして竟に一切の人間の労働は、夫は一般に人間の労働であるが故に、又ある以上一樣にして、一樣に妥當すると云ふことは近代の經濟學の價值法則に至つて無意識的ではあるが、最も力強き表現を見出した。夫に従へば、ある商品の價値は、その商品に含まれた社會的に必要な労働に由つて測定せられるのである』と。

此の一樣なる且つ一樣に妥當する労働の規制に就てもマルクスは必ず労働を労働の自然的科學的—技術的方面から把握せず、唯獨り社會的關係の溶接劑となり得る人間人格の事實的支出として把握する一種の觀方に終始してゐるのである。労働の抽象的普遍性は、法律主體の普遍性であつて個人的な諸の規制に對して無



關心であり、従つて肉體的勞働と精神的勞働との對蹠に對しても局外者である。

三、此の肉體的勞働と精神的勞働との對立が、抽象的普遍的勞働なる概念の内部に於てマルクスが企てた單純なる勞働と複雑なる勞働との對立と屢々同一視せらるゝことは等閑に附し難いことである。此の非常に曖昧な、而もマルクスが極く簡單にしか觸れなかつた點を中心起つた論争を此處で論ずることは不可能である。吾々に取つて問題は、價值論に關する吾々の見解が此の場合にも貫徹せられ得べきことを見れば足りるのである。單純なる勞働と複雑なる勞働との對立の意味は明白である、單純なる勞働とは(註)、『凡て通常の人間がその肉體的構造に特別の進歩もなく平均に有する單純なる勞働力の支出である』。此の單純なる勞働は、マルクスに従へば、量的に見ると國民勞働の壓倒的部分を占めてゐるものである。尤も夫が爲に單純なる及び複雑なる勞働の對立に對して何等過大な意義

を歸する譯ではない。複雑なる勞働とは『より大なる特別の重みを有する勞働』である、蓋し之にはより多額の教養費用が入り込んでおり、随つて夫が活動には、直接勞働の人格許りでなく、同時に嘗つてその勞働完成に働いた人間全群の人格が沈澱してゐるからである。故に吾々は、夫の抽象的—普遍的勞働なるものをしつて飽くまで社會的依存關係の一準繩たらしめやうとすれば、複雑なる勞働及び單純なる勞働が呈示する、此の如き、同一の勞働時間でも幾分か異なる社會的重みと云ふものを、單純なる勞働に於て與へられてゐる一樣なる勞働力の共通な分母に還元することが必要である。されば、他の場合に於て複雑なる勞働と單純なる勞働とが質的に如何様に區別されやうが、今當面の目的から云へば獨り『社會的厚み』に於ける右の如き量的差別が此の對立を決定し得るので、複雑なる勞働と云ふのは單純なる勞働の倍數と見ることが出来る。併し、とは云へ、複雑なる勞働が問題になるのは、夫が社會的大衆現象として斯くの如き還元が可能である場合に限



るのである、換言すれば、一般に費用さへ投ずれば、どんな平凡人にも修得し得るが如き種類の複雑労働のみが問題となるのである。天才の有する獨創的—創造的労働は全然問題外で、現に考察しつゝある現象以外の事柄である、何故かと云ふに、斯くの如き労働が生産行程の流動に入り得ないことは明白すぎる位明白であるからである。随つて、『ドナテロの彫刻を評價する』が如きは、管に不可能である許りでなく、全然不必要な課題である。

(註) マルクス『資本論』第一卷一頁

複雑なる労働を單純なる労働に還元する問題に關聯して、マルクスが此の際、競争に如何なる役割を振り附けたか、蓋し方法上興味ある問題である。『種々の労働が單純労働を測定單位として還元されてゐる種々の割合は、社會的過程によつて生産者の背後に於て決立され、従つて生産者達には慣習によつて定つてゐるもの、如くに映する』。その割合は、勿論此の場合も交換關係に對して客觀的規準

を供すべき價值法則の適要事項に外ならないが故に、マルクスの見解としては、毫も獨り資本主義的競争の複雑な關係に限らず、斯くの如き單純なる場合でも、價值法則は生産者の意識内にはなく、個人には意識せられぬ競争の結果として現はれると云ふことになる。併し競争の動力は個々の参加者の諸の誘因に求むべきものなるが故に、之によつてマルクスが價值に由る交換の法則を動因と見ず、必然的に條件附けられた成果と觀てゐることは十分肯けることであつて、茲にマルクスに於ける價值概念の方法論的構造に關する吾々の見解に對する間接の實證を求むることが出来る。此の點は、此處では單に指摘するに止むべく、後に量的價值問題を述ぶるに際して更に詳細に亘つて論ずる必要があらう。

四、『商品に含まれてゐる労働の量は、此の商品を生産する爲に社會的に必要なる量である——従つて労働時間とは必要なる労働時間を意味する——』と云ふことは、單に價值量にのみ關する一規制である。(註)吾々が茲に此の問題を考察す



るのは、全く、此の問題を量的價值問題として、『價值實體』を圍繞する全然異質の最初の二問題から明白に分離する爲めである。従つて之に對する吾人の態度は後章に於て始めて決定せられるであらう。

(註) マルクス『剩餘價值論』第三卷一六〇頁

### 第五節 マルクス價值論の普遍的性質

吾々は既に前段に於て、價值論に於ける出發點が如何なる經路を経て竟に價值觀察の原理としての勞働に達したか、勞働の自然的—技術的概念と異なる、如何なる社會學的勞働概念が價值觀察に對する決定的なものとなつたかを述べた。マルクスは、斯くの如き抽象的—普遍的勞働の生産物として使用財貨を『價值』と名付けた、此の如き價值觀察の觀點からすれば、財貨は彼にとつて『凝結した勞働時間の一定分量』に過ぎない。之に由つてマルクス流價值概念の性質に關する一

定の推及が可能になる。

一、大抵の價值論に於ては、價值と交換價值とが分離せず、よし如何に詳密に規定せられても、價值と呼ばれる現象複合體を以て、原因としてあると、尺度としてあると將又何としてあるとを問はず、財貨の交換關係に對して直接なる關係があると主張せらるゝのであるが、マルクスの見解は之に反して財貨を價值と觀るも之丈では未だ何等具體的なる交換關係即ち交換價值には觸れてゐないのである。『資本論』に於て初めて成就せられた『價值』と『交換價值』との區別には嚮に吾々に由つて考察せられた質的及び量的價值問題の區別が對應する。縦しマルクスが、完全に抽象的—普遍的勞働の生産物と認められた財貨を指して『價值』と呼んでも、此の『價值』概念には、交換價值問題の『社會的』取扱に對して方針を與へる處の謂はゞ先驗的條件が綜合されてゐるに過ぎないので、具體的社會組織に於て價值が互に交換せらるゝ量的比率に關して何とか云つたのでは



ない(註)。

(註) マルクス『剩餘價值論』第三卷一五三頁

こんなことは逆理に聞ね、通例の用語にも反する如くである。又吾々は、マルクスが屢々『價值』の概念を可成り混雜な内容を以て充たし、之を『商品』の概念とを同視して、既に、競争に由つて媒介せられた労働生産物の一定の交換關係さへ想像してゐることも承認せねばならぬ。斯くの如き價值概念の二重の意義はマルクス價值論の兩面神ヤヌスコフに慣れてゐる吾々には別段驚くに當らぬものである。併し、茲に吾々がマルクスの價值論から抽象し、夫丈けを切り離して表はし度いと思ふ所の思索關係に於ては『價值』は上述の意義に於てのみ初めて理解することが出来るのである。斯くして始めて資本論第一卷と第三卷との統一的理解が可能である。蓋し、資本論第三卷では此の如き具體的交換とは先づ全然無關係な價值概念の意義が際立つてゐるからである。夫と生産費との衝突は價值觀察の課題とは

ならない、却つて此の課題は生産費を社會的内容に分解する爲に今や正にその全精力を發揮してゐるのである。

二、そこで、如何なる限定された意味に於て抽象的—普遍的労働を『價值』の實體と云ふことが出来るかと云ふことが問題になる。マルクスは、交換價值範疇の外に價值實體なる概念を移入して此の價值を絶對化しやうと云ふのではない即ち、物財の一の『特質』(註)一の客觀的特質たらしめやうと云ふのではない、何故かと云へば、上來論じ來つた所に由つても瞭である如く、此の價值概念に依つて社會學的範疇、即ち社會的關係解剖の手段を獲得することが實にマルクスの追進目的であつたからである。『價值』として商品は社會的質量である、即物としての商品の諸特質とは絶對に異なる或るものである。商品は價值としては、この商品の生産的活動に携はれる人間の關係を表現するに過ぎないのである。『労働は、此の意味に於てのみ、即ち労働が、労働人格の觀念的關係が據つて以て物財世界の物



的關係に轉化せられる溶接劑たる場合にのみ價值の實體なのである。労働は社會的依存關係の尺度である。今吾人が強調せんとする思索關係に於ては、價格高低の實質的原因に非ずして價格現象の社會的内容の指示者である。

(註) ボルトキエグイツチ(『アールヒーズ、フユウル、ゾチアールポリテイーク』第二十五卷)は、『絕對價值』と交換關係の指標としての『價值』との此の對立に注意を喚起してゐる。彼はマルクスが此の絕對的價值を『眞の價值』(剩餘價值論第二卷第一冊一五〇頁)『内在的價值』(資本論第三卷第一冊一四七頁)と呼んだ文句若干を引用してゐる。マルクスは『市場價值』に對して商品の個別的價值に就ても似通つたことを云つてゐるのである。

三、更にマルクスは、如何なる限定された方針を以て資本主義的價格現象に關する彼の社會學的解剖を制限せんとするかと云ふ問題が起る。彼は、競争制度の外面的諸形式の下に陰蔽されてゐる人間労働の組織形態を準備せんとするのである。種々の仕方では人間間には社會的關係が作出されるが、マルクスは、分勞の事

實に由つて作出された社會的關係のみを觀察せんとする。斯くして、狹義の、本來の意義に於ける社會的經濟の領域と呼ぶも差支ななき一領域が社會現象界から截然區別される。マルクスの見解を以てすれば、労働及び分勞が一切の經濟的範疇が規制される最高の概念となる、蓋し労働の社會的組織の解剖が經濟學の對象であるからである。マルクスは交換行爲及び財貨から出發せず、人間が經濟的再生産行程に於て結ぶ社會的労働關係から出發するのであるが故に、彼は最初から労働生産物に非る一切のものを除外する。

斯くて全財貨界の世界から、『人間労働力の結晶』として『全價值』一般として社會的關係の媒介たり負擔者たり得る所の一個の複合體が浮び上る。是由觀之、價值論の課題は此の如き『全價值』の分配、夫に由つて特徴附けられた個々の、社會階級の分前の條件及び多寡を確定することである。之、マルクスが一切の收入をば一定條件の下に於ける人間労働の支配形態と觀る所以である。若し個別の收入



部門を、個人の誘因機構に備はる主觀的な條件から説明し、資本利潤でも現在財と將來財との評價上の差異から或は節約に對する褒賞として説明するならば、價值論の課題は十二分の解決を得ない。資本利潤を社會的現象として理解するが爲には、利潤をばその多寡及び種類と云ふ點から見て明確に特徴付けられてゐる『全價值』に對する持分として、人間労働に對する支配形態として従つて社會的關係と解さねばならぬ。

そこで、『物化せられた社會的労働』に外ならぬ此の『全價值』中から一部分は分離する、夫は勞賃として労働階級に注ぎ込む所のもので、その大きさは労働階級の維持及び再生産の必要を通じて伸縮する限界を持つてゐる。その殘餘は労働階級の剩餘労働として剩餘價值として現はれるが、今や種々の割合で個々の社會階級の間に分けられ、利潤、利子、企業利得、種々の地代として夫々獨立の形態を探る。『資本主義的社會に於ては此の剩餘價值又は此の剩餘生産物は……配當と

して社會的資本の各部分に所屬する持分に比例して資本家之間に分配せられる、斯くの如き形態に於ては剩餘價值は資本に歸する平均利潤として現はれる、夫は更に分裂して企業利得と利子となり、是等兩個の範疇の下に種々なる種類の資本家の所有に歸することが出来る。併し斯くの如き資本に由る剩餘價值の奪取及び分配は、土地所有に由つて限界される。その職分を發揮しつゝある資本家が剩餘労働を夫に伴ひ利潤の形態で剩餘價值を労働者から汲み出すやうに、地主は此の剩餘價值の一部を再び資本家から地代の（種々なる形態の）下に汲み出す。（註一）マルクスは總じて是等の收入形態を量的に一定せる『價值』成分と解するのであるから、是等の收入形態の外面的現象の多様性や是等收入形態の成立及びその時々が多寡高低を説明する理由の不同に頓着なく、飽くまで是等收入形態の質的一様性が社會的關係であることを主張し、その收入形態の價格形態の下に隠れてゐる社會的内容を社會的労働の一定の歴史的組織形態として理解しやうとする



が故に、斯くの如き全體的分配を價格形式の方法に由つて實現する競争の因果的機構は此の場合全然その觀察の範圍外に屬する。彼はその結果の、即ち競争に存在する力の成果の社會的意義を理解せんとするのである。「競争の現實の運動は、吾人の計畫外に在る。吾々は茲では單に資本主義的生產組織の内面的組織を、謂はゞその理想的平均を記述すれば足りる。」(註二)

(註一) マルクス『資本論』第三卷第二册三五五—五六頁

(註二) 『資本論』第三卷第二册三六七頁

茲に於て吾々は再び本論の冒頭に於て述べた問題であるが、單に競争の外觀を「表面」に現はれるが儘に觀察する丈で、事物の内面的關係を見ぬと云ふ俗流經濟學の處置に對するマルクスの批評を回想する。右の批評を換言すれば、俗流經濟學なるものは、社會的關係を物化し、夫は社會的生產關係であつても自然的物的關係と見るのである。由是觀之、斯くの如き現象と眞實在との關係、皮相と内面

的關係との關係は、實は二種の異つた觀察方法、即ち説明的—因果的觀方と社會的關係の意味と理解とを旨とした觀方との關係であることが瞭である。マルクスが、「資本主義的生產の内面的關係」と名付けたものは、その内面的關係が剩餘價值論の構造に由つて闡明せらるべきものであるから、實は資本主義的競争てふ單に外面的な齒車仕掛を運轉する、より深刻な因果的動力の認識ではなく、夫は却つて事<sup>ポストフェクトム</sup>後の試みである、換言すれば資本主義的競争の成果をその社會的内容に分解せんとする試みであるのである。

交換關係の單に因果的な説明を旨す觀方からすれば、一切の収入は價格現象であつて、収入の種別は収入源泉と見做される生産條件の物的性質に、即ち生産條件の勞働行程に於て有する役割に歸着せしめらるゝ。斯の如き觀點からすれば、地代は土地の成果の價格として現はれ、利潤は生産せられたる生産手段の價格形成を指し、勞賃は第三位の技術的生產要素、勞働の價格である。斯くの如



き、循環現象及び交換現象の説明に附けられた眼光には、諸収入は、單に物質的に、即ち技術的生產行程に於ける銘々の役割を標準に區別さるゝ財貨の價格現象としか映らぬ。夫は使用價值の領分である。併し、よしんば斯くの如き立脚點が價格現象の純理論的捕捉に對して如何許り理由があるにしても、價格現象の社會的理解に對しては何等資する所はない(註一)。マルクスの『三位一體的公式』に對する嘲笑は、實は、此の、價格の説明的解剖に於て重要視される収入源泉の技術的—物質的性質を社會の相互的構造理解の手段としても利用したり、技術的任務及び、『自然力の王國』『昔からあつた凡ゆる労働對象の寶庫』としての土地や既に生産せられた生産手段や合目的的生產活動としての労働が生産行程に於て取得する銘々の分前をば、直に利潤勞賃地代としてその社會的代表者に流入する分前とを一緒にしたり、従つて、資本主義的生產行程に於ける生産要素の歴史的に條件された社會的特質を、彼等の自然の、謂はゞ無始以來生産行程の要素として生

み附けられた物的性質と見做さんとする企圖に當てつけたものである(註二)。之に對してマルクスは、諸の収入の技術的條件の如きは、社會的理解にとつて全然在つても無くても同然であると云ふ彼一流の立場を以て臨んでゐる。蓋し、獨り此等の収入に於て設定された社會的な、特殊—人間的關係のみが問題なるが故である。

(註一) 茲に所謂理解が個人的心理的存在の經驗の意味ではなく、個人に於ける心理的事象から全然獨立せる、超個人的な、非現實的な意味の把握が考へられてゐることは明である。リツケルトの『自然科學的概念構成の限界』五二二頁参照。

(註二) 『資本論』第三卷第二册三六一頁。

由之觀是、マルクスに於ては、終始一貫して、年々分配せられ得る一切のものは悉く人間労働に歸屬せしめられねばならぬ、人間の労働のみが個々の収入となつて種々なる社會階級の間分配される實體を作出すると云ふ立場が固執せられてゐることが判る。此の立場には、實際的倫理的平等の要求たる、『労働全收權』



の要求は、毫も存在しない。純粹の認識目的に奉仕する概念形成があるのみであつて、その一見政治的臭味を帯べるは、唯單に、總ての文化科學を生む實際的基礎を暗示するに過ぎないのである(註一)。輓近の、よく人口に膾炙せる術語を使つて云つて見るならば、斯う云ふことが出来る、マルクスの價值概念は、夫が經濟科學の嚴密に限定せられた埒内に於て、一の個性的歴史的經濟形態即ち資本主義的組織をその社會的價值内容から理解せんとする課題に役立たんとする限り、何等積極的な價值判斷を含んでゐない、單に是に由つて價值關係の理論的原理が表現されたに過ぎないと(註二)。

(註一) マルクスの解説は悉べてマルクスの勞働價值説に倫理的性質を附加する爲にこのことを看落してゐる。シユタムラーやマリアンヌ、ウエーベルもそうである。

(註二) マルクスの價值概念の方法論的構造に關しては猶ほ本論末尾に於ける詳論を参照せられ度い。

## 第六節 マルクスとリカルドの關係

斯くの如く、勞働を社會的依存關係の尺度と觀る所にマルクスの勞働價值説の基礎がある、故に此の説は、その内面的意義から云へば、一種の社會的分配論である。従つてマルクスはリカルドとは決定的反對に立つてゐる、蓋しリカルドの勞働價值説は實は一の價格論に過ぎず、その分配概念は全然個人主義的性質のものであるからである。マルクスとリカルドの關係は、マルクス一流の觀方に由つて、彼自ら自分はリカルドの祖述者にして完成者に過ぎずと感じてゐた爲に、幾重にも誤解されて了つた。何故誤解と云ふかと云ふに、單に外形的には類似してゐてもその背後には兩思想家の全然異つた哲學的習癖に由つて條件された根本的相異が支配してゐるからである(註)。

(註) マルクス、リカルドの價值論の相違に付ては特にデイールの『リカルド論』第二卷九四頁を参照。

成程一見すれば宛もリカルドの出發點も社會的であるかに思はれる。彼は、生産から分離して獨立せる分配論をば價值論の主要問題として限定することに由つ



て、スミスの地代論には未だ含まれてゐる重農主義的要素から免かれてゐる。が併し此の分配論そのものは、彼をして、その利害は常に相互的に對立する許りでなく、地主と小作人との場合に見る如く、一般的福祉の利害とも對立する所の獨立な諸階級の對立に到達せしむる。併し此の分配の概念は、リカルドに於ては一種個人主義的内容を取得する。夫は自然的總收益の分配である。各階級の使用價値的總生産物に對する分前ではあるが、マルクスに於て見る如く、完全に人間労働に融解された、『價值』生産物の分配に由つて設定される人と階級との社會的關係ではない。技術的生産行程の自然的餘剰收益をば直に所得と同一視する總ての重農主義的偶像崇拜に比すれば、リカルドの、余の見解を以てすれば分配問題は價格問題であるとする問題提供は非常な進歩である。之は又、表見上は土地の異つた自然的豊度に基づくかに見ゆるリカルドの地代説にも當て嵌まる、何故と云ふに、リカルドの見解を以てすれば、地代は、競争に由つて惹起された價格形成

の結果で、夫がより優良なる土地の耕作者に對して彼等の生産物の價格が生産費以上の餘剰を生むことを許すからである。マルクスとリカルドとは重農主義的見解に對する反對では「地代は耕作が營まれる條件たる社會的關係の成果である……。地代は社會から發生しても土地からは發生しない」と云ふ點で全然一致してゐる(註一)。リカルドが「地代は毫も創造ではない、財産の移轉に過ぎぬ」(註二)と云つてゐるのも此の意味である。

(註一) マルクス『哲學の貧困』一五三頁。

(註二) リカルド『經濟學及び課税の原理』一九四頁。

リカルドが重農主義的見解に反對して分配論を價格問題と觀、夫に伴ひ、一切の所得部門を説明する爲に、競争の社會的過程に轉じた迄は、彼はマルクスと全然歩調を一にしてゐる。さればこそマルクスはリカルドの差別地代説を受け入れることが出来たのである。併し吾々は斯くの如き一致の爲に兩思想家の間に存在



する重大なる差違を看過することは出来ない。リカルドが假に分配を社會的に條件された事實と解するも、夫は社會的生產關係と解するのではない。何故ならば、リカルドに於ては、生産物の價值を完全に勞働に融解し竭す意味に於て絶對的價值論を論ずるが如きは思ひも寄らなかつたからである。従つて、リカルドは抽象的—普遍的勞働の概念も持たねば、剩餘價值論も持たないのである。リカルドが分配論に於て重要視したのは競争の支配を通じて、自然的全收益に關して、即ち「勞働、土地、機械及び資本の結合せられた使用」に關して個々の社會階級に注ぎ込む所の相對的分前を確定し、並に一般に社會の進歩に附隨する此の如き分前の變化の法則を確定することであつた。此の分前は價格、換言すれば、貨幣に由つて表現される財貨の交換價值に由つて規律される。併し價格の變化が必しも夫自體生産收益プロダクチオンズニヤトラーグに關する相對的分前の増加又は減少を意味しない。貨幣價值そのものに於ける變化は全然問題にしないとしても、例へば、勞銀の騰貴は生活資

料の價格の上騰に由つて止揚され得るし、或は利潤と地代の貨幣表現が従前と同なるも物價低落の結果夫は全生産物に對して従前より大なる分前を表はすことが有り得る。従つてリカルドがマルクスと相似た仕方では外面的價格現象、競争の現象の背後に「眞實」の關係を索むるとするも、マルクスがリカルドの殊勳の一に數へた通り、果して彼が、「市民的社會の内面的生理學を究めん」と試みたとするも、猶ほマルクスとリカルドとの間には根本的な區別が嚴存する。即ちリカルドを以てすれば、此の如き隠れた内面的關係と云ふは單に個々の階級間に於ける自然的總生産物の分配を意味するに過ぎない、階級相互間の關係に着目することはない。之に反して、マルクスは、價格變動の背後に於て遂げらるゝ分配は孤立せる庶民階級の間には豫備の使用財貨の貯藏を分配することではなく、完全に人間勞働に融解せられた生産物の分配、總價值の分配、隨つて生産者間の社會的關係と解するのであるが故に遙に徹底してゐる譯である。



(註) マルクス『剰餘價值論』第三卷三頁

所で、リカルドに在つては、労働は價值の原因として前に掲げた様な課題に奉仕するのであるから、リカルドには何等の剰餘價值論もないことになる。上述の如き、就中マルクスの解釋に由つて育まれたリカルドの觀方は、リカルドの僅少の文字に由つてしか支持され難いもので、夫を論駁するには態々リカルドが交換價值を全然労働に融解することに公然反對を表明せる數多の疑ふ餘地なき文章を要しないであらう。即ちリカルドの國民經濟現象觀察方法の全精神が夫に反對してゐるのである。リカルドにも一個の剰餘價值論ありと説く者は、リカルドとマルクスの根本的な方法上の差違を抹削し、同時に兩思想家に對する正當な理解を混惑するものである。外見上全く相似た労働價值説をば斯くの如く異つたものに仕上げた點に社會的生活の諸問題に對する兩者の根本的に相違した態度が覗はれる。經濟生活を自然科學的範疇を以て捕捉せんと企てたリカルドを以てすれ

ば、全くスムスの意味に於て負擔及び骨折りと解せられた労働は財貨の交換價值の高低を決定する他の諸原因と同格のものであつた。リカルドはマッコロックに書を寄せて曰はく「余は時折り、若し萬一余が余の論文に於ける例の價值に關する章を今一度書くことを許されたとしたら、余は生産物の相對的價值は一個に非ずして、二個の原因に由つて規律される、即ち生産物の再生産に必要な労働の相對的量に由つて、及び生産物の價值が實現せられる迄に流れ去る時間中投下された資本から受け取らるゝ利潤の歩合に由つて規律されると云ふことを指摘したことであらうと思ふ」と。之に由つて觀ると、労働は交換價值の一定量の原因として他の要因と同格に取り扱はれてゐても、決して交換價值の實體としてゐない。リカルドは生産物を完全に労働に溶解し竭さない、夫故又利潤として企業家に注ぎ込む生産物の分前をば剰餘價值論の意味に於て一定の社會階級の労働に還元することもしない。又屢々リカルドに剰餘價值があつたことを證明する爲に引例せらる



る勞銀の變動と利潤の變動との關係も如上の見解と矛盾するものではない。何故なれば、勞賃の一般的騰貴は利潤低落を惹起すると云ふことは、價格運動の下に行はるゝ眞の分配は自然的總收益の分配であると云ふリカルドの分配概念に依存してゐるからである。國民經濟中に於ける諸の力の作用で全收益中からより大なる部分が勞銀なり或は地代に落ちるに至れば資本家は當然より少い分前で満足せねばならぬ、何故なれば、此の彼等の状態の相對的惡化は、一齊に一切の資本家に起るのでその結果彼等は此の惡化を相互に轉嫁することが出来ないからである。

扱てマルクスは、既に述べた如く、此の、財貨に費される勞働が、價格形成の、随つて個々人の所有に歸する財貨量の最も重要な原因として現はれるとなすリカルドの價值論の中に、吾々が今迄、明瞭に彷彿せしめんと只管一面的に描出して來た如き全然別個の思索過程を建て込んで了つたのである。由是觀之、マルクスの國民經濟的現象の理論的解剖に於て彼にとつて重要だつたのは、孤立せ

る個人或は階級に歸屬する使用財貨の相對的量はでない。彼の社會の相互的構造に附けられた眼光には是等の使用財貨は謂はゞ社會的分母に還元されて映する即ち完全に、上述の人間人格の支出の意味に於ける人間勞働に融解されたものとして映じ、財貨の分配は、勞働人格の具體的社會的組織として映するのである。夫と同時にマルクスには夫と覺られずしてリカルドの意味するが如き價格高低の一原としての勞働は、社會的隸屬關係の規準としての勞働に變化した。リカルドに見る勞働の技術的概念から抽象的—普遍的勞働の社會學的概念となつた。併し乍此の價值としての勞働の概念及び意義の變化は、マルクスに在つては決して徹底的なりカルド嫌厭として遂げられずして、リカルド價值論の本質的動機を保存しつつ、その價值論の中に築き上げられてゐるのである。之、マルクス流價值論の解説を爾く困難ならしめ、マルクス流世界觀一般の矛盾軋轢の一平行線に外ならぬ夫の二重性と内証性の發生する所以である。



## 第二章 量的價值問題

### 第七節 價值の『實現』

從來吾々の試みたマルクス價值論解説は二重の人爲的區別に基いたものである。一は本論題の課題とする所に従ひ、専ら價值論を、世間一般に流布せる自然科学的觀方に反してその文化科学的動機に於て認識せしめる價值論の一方面を明瞭に仕度く思ひ、その價值概念を更に展開して社會的生產關係解剖の一手段たらしめたことである。他の一つは此の右の如く限定せられた制限内に於て更に質的價值問題と量的價值問題とを截然と區別し、そして從來は専ら前者に存する價值問題の社會的處置に關する一般的條件を考察した。今や更に論歩を進めて、その量的價值問題の研究に由り、マルクス價值論の有るが儘の姿態を明にせんとする

に當り、吾々は嚮に簡單に前提した自然科学的要素と文化科学的要素への最初の分裂の可能性に對しても態度を決定して置く必要があらう。斯くて吾々は次の如き結論に到達するであらう、即ち斯くの如き分裂は可能である、蓋し第三卷に於いて本質上根本的に異なる二個の課題を同一の手段を以て解決せんとする企圖の全然破綻したことは之マルクス價值論分裂性に對する最良の證明であるからである。

先づ吾々の從來採つた觀方に基づく時、量的價值問題は如何に説明せ得らるゝかが問題になる。財貨を人間労働の生産物として、『凝結せられた労働時間の一定量として』、『價值』として見る觀方には諸財貨の經驗的交換關係に對する何等一定の關係が存在しないことは既に述べた如くである。成程生産に於て生産物は既に労働時間に由つて量的に測定せらるべき直接生産者の人格の一部分を吸収してゐて、生産物はそのまゝ、一定の『價值』として流通行程に入り込む。が併し獨り交



換及び競争の領分としての流通行程のみがその價值を實現し、その價值が如何なる比率を以て交換行程にたづさはれる諸階級の間分配せらるゝか、決定される條件を含んでゐるのである。價值は一定の、固定せる不變の量として循環に入り込むが故に價值の『實現』とは『價值』の分配を置いて外にない。即ち如何なる歩合で個々の階級は價格形成の具體的過程を通じて『總價值』に與るかと云ふ事より外にない。縦し此等の實現の條件は如何に形成されやうが、是等の條件は全價值の多寡を微塵も變化することは出來ない、變化され得るのは、全く全價值の、種々の經濟主體及び階級間に於ける分配に過ぎない。技術的に拙劣なる條件の下に生産せられた商品がその『個別的價值以下で』賣られると云ふことは、何も現存の價值量の絶對的減少を意味しない、却つて買手からすれば、より少き労働に對するより多き労働なる有利なる交換を意味するが、その時賣手は決して投せられた労働量の等量を受け取らない、即ち彼の價值を完全には『實現』しない迄である。

逆にその土地生産物を『その價值以上に賣る』ことが出来るのは土地獨占に由つて與へられた機會に基づくもので、何等價值量の増大ではない。夫は矢張り一定の分配様式に過ぎない、即ち土地生産物の買手が價格形成を通じて彼等が生産せる『價值』の一部をば土地所有者に對して不當に譲り渡すことを餘儀なくされる事實しか存在しない。『若し商品がその價值以下か以上で賣られるとすれば夫は畢竟剩餘價值に關する別の分配が起つたにすぎぬこと、斯くの如き異つた分配、即ち種々の人間が剩餘價值の分配に與る種々の比例は剩餘價值の多寡にも或は剩餘價值の性質にも殆ど何等の變化を起すものでないことは何等説明を須ひぬ事である。實際の循環行程に於ては常に吾々が資本論第二卷に於て考察した諸の轉化が起る許りでなく、是等の轉化は現實の競争即ち商品の價值以上又は以下の賣買と一致し、従つて個々の資本家にとつては自己の實現する剩餘價值は労働の直接なる收奪に左右されると同じく交互の權謀機先に由つても左右される事になる』(註)



(註) 資本論第三卷第二冊一七一—一八頁參照、猶ほ之には之と似た次の文句を參照せられたい、即ち(III. 2, 3, 381-82) 『……同様にこの價值法則は、利潤の平均、即ち總剩餘價值の種々なる資本間の分配と一部分ながら(絶對的地代に於て)土地所有が斯くの如き平均に與ゆる障害とが商品の規律的な平均價格を夫等商品の個別的價值とは違つたものに決定すると云ふ事の爲に變化を被ることはない。夫は單に再び種々の商品價格に對する剩餘價值の割増に影響する丈で、剩餘價值そのもの、そして斯の如き種々な價格成分の源泉(・)としての總價值を止揚するものではない』『資本論』第三卷第二冊三百九十七頁には、『或る商品の獨占價格は他の商品生産者の利潤の一部をば獨占價格を有する商品に讓渡するに過ぎないであらふ……。間接に種々の生産部門間の剩餘價值の分配に局部的な動搖は起るであらうが、剩餘價值その者の限界はその儘であらう』之は一見マルクスの他の若干の文言と撞着するかのやうである、從つて吾々は更に一つの限定を加ゆる必要がある。即ちマルクスは種々の箇所にて(例へば資本論第三卷第二冊一七五—一六頁、剩餘價值學說第一卷二三三頁)、種々の生産部門間に於ける總労働の比率的分配の條件下に於てのみ價值の實現は可能なること、此の比率が損はるれば商品の價值從つて又商品に内在する剩餘價值は實現され難い』ことを承認してゐる。——上掲の觀方と此の意見の矛盾は次の様に云へば説明される、即ちマルクスは單に平衡狀態を社會的内容を標準に分解せんと欲したので變動故に變動を分解しやうとはしなかつたのである。故に價值に由る交換の不同は夫が靜穩に歸した競争の平衡に際しても起る以上價值の別な分配を意味するに過ぎない、夫が競争の動搖に基づく限りは價值量の變動を意味すると。

マルクスの價值概念を以て價格現象の社會的内容の表示者と觀る吾々の觀方は、價值は生産過程に於て發生するも流通行程に於て始めて實現されると云ふ、此の絶えず繰り返へす思想轉換に於て最も明瞭に現はれてゐる。右の文章に由つて價值は最早何等積極的に作用する原因でなく、價值の分配は流通行程の諸の條件及び動力、換言すれば、即ち競争に左右せられるものなること、併し一方に於て流通領域即ち價格現象を單純に觀察したのみで之を生産行程に係はらしめて分配現象と解するに非ずんば、必然にその社會的内容を看過するに至ることが明になつた。マルクスが價值實現の諸條件と價值發生の諸條件とを同一視して價值を流通行程に於て發生せしむるの否を警めるのは、實は、財貨の交換行程をば生産の諸條件から隔離した爲に交換行程の特に人間的にして且つ社會的なる内容を看過する『偶像崇拜的』な立場に對する彼のいつもの駁撃を繰り返へしたに過ぎない。



い。マルクスが競争の解剖や價格構成の解剖に於て要求し、且つは量的價值問題の特徴を成す所の夫の特殊の方針、換言すれば社會的『價值』産物の分配(『實現』)が此の一定の歴史的社會秩序に特有なる競争の價格形成力を通じて如何に出現するか、經濟主體の私經濟的努力が個人自身には意識せられぬ如何なる社會的結果を惹起するか、如何なる比例に於て勞働生産物が典型的交換關係に於て交換せられ、夫に伴ひ特殊の、社會的關係が設定されるのであるか、を解剖する夫の特殊の方針は、前述の如き、國民經濟的觀察の爲の生産行程及び流通行程綜合の要求に由來するのである。

却説、量的價值問題を斯くの如く解する時は、尤も之は質的價值問題に關する吾々の見解の當然の歸結ではあるが、如何にも競争はマルクス體系に於て身分不相應なる役割を承認されたかに見ゆる。然り全體の關係が轉倒した觀がある。何故ならば、吾々の見解に従へば價值の分配を決定するものは競争の運動なるに反

し、マルクスに於ては逆に價值が競争の運動を決定するが如くであるからである。之吾々が競争のマルクス體系に於ける地位を更に精しく穿鑿せざるを得ぬ所以である。

### 第八節 マルクス體系に於ける競争

マルクスが彼の體系に於て競争に指定した地位は全く曖昧である、蓋し此の場合彼の價值論に置かれてゐる種々の動機が互に優劣を競つてゐるからである。既に述べた通り、マルクスは彼と『俗流經濟學』との相違は、先づ第一に俗流經濟學が瞥見した儘の事物の世界のみを見る場合に、自分は『社會的』關係なるものを曝露せんとするのだと云ふ風に解した。従つてマルクスが勞働價值の思想を用ひて、競争の『單に外面的なる、表面に生滅起伏する現象』に對して資本主義的生産方法の『内面的組織』を曝露せんとするも、之は、嚮にも論じて置いた通り、決し



て夫々實在價值を異にする二つの世界の對立を意味するものではなく、畢竟するに競争の現象に於て設定された、主體としての人間間の社會的關係の解剖を目標とした競争現象に關する一の觀方の反復的強調を意味するに過ぎないのである。

所が、斯くの如き、勞働は社會的關係の表示者であるてふ思想の外にリカルドの勞働價值説が受け容れた、勞働は交換關係の指標であり、價格高低の原因であると云ふ思想がある。所でリカルドが此の思想を以て、競争に於て作用する力以外のそして夫以上の或る原因が假想されてゐるのだと云ふ迄に解してゐなかつたことは明である。競争は云ふまでもなく只單に需要供給に現はれる諸の力、換言すれば目眩るしい市況に目眩るしく變通自在に反應する市場諸黨の決意の結果が綜合された集合概念を意味する。故に價格が勞働に由つて統整せらるゝと云ふことは需要供給法則の廢黜を意味しない、單に兩側に作らく諸力のより精密なる規制及び決定を意味するに過ぎないのである。

所がマルクスは、一は勞働價值をば價格現象の『内面的』、即ち社會的内容の分解の手段と觀、他は勞働價值をば需要供給の運動を規制する因子と觀る是等二個の全然異なる思想をば彼獨特の仕方で融合して了つた、尤も夫では是等兩要素の中の孰れの要素も、各々他の一方の爲に混淆惡化される、換言すれば『内面的』、『社會的』關係は、『内面的なる』、『眞の』因果系列として競争の單に外面的なる運動とは無關係なる一の獨立な因果系列の臭味を帯びるに致るが故に決してその所を得ないのであるが。——成程夫が、マルクスに従へば、諸の財貨が夫に含まれた勞働量の比率に由つて交換せらるべき單純なる商品生産の解剖である以上は、斯くの如き融合は先づ潜在的に存在するに相違ない、此の價格問題と分配問題との經驗的一致が此等の兩問題の取扱に關する方法上の手段の區別に對する眼光を曇らせるのである。が併し價值と價格とが區別せらるゝ資本主義的生産内に於ては斯くの如き融合は非常に曖昧な、經濟的形而上學と成らざるを得なから



う。

之、價值は夫自身の中に自己の運動及び分配の原理を含んでゐる、價值、即ち此の一種の『自動的主體』(註)は神秘的、超個人的なる、即ち全然個々の生産者の意識外を流れる因果系列に於て、(競争の諸現象は夫に比すれば表見的なる獨立性しか有せざる)社會的關係の形成を規制するてふマルクス獨得の表象の由て來る源泉である。今や全價值の分配を規律するものは最早競争諸關係の特別なる形成ではない、却つて競争を規律するものは、先驗的に與へられた、價值の『自働』に結果する分配圖式である。個人の意志の方が從屬的なる競争てふ社會的因果律が、化して競争の方が從屬せる超社會的、形而上的必然性となる。

(註)『資本論』第一卷一一七頁

マルクスが競争の價格を決定する力を單なる外觀と呼ばねばならず、價值運動の『内面的』因果系列と對比して需要供給に現はれる諸力を除外せねばならぬのは

斯くの如き見解から出でた當然の論斷に過ぎない。所がマルクスは此の競争の除外をば非常に獨得なる仕方であつた、即ち『自然的』價格を需要供給の平衡せる力の結果とは考へず、却つて此の如き平衡の事實に基づき、換言すれば、斯くの如き『需要供給の一致』に基づいて、需要供給は相互に彼等の作用を麻痺せしむるが故に需要供給に由つては生産物の市場價值は説明せられ得ぬと論斷した。『需要と供給とが一致すれば、兩者は作用しなくなる、そして斯く作用しなくなればこそ商品は市場價值通りで賣られる。二個の力が相對せる方向に一樣に作らければ、兩者は互に相殺して、外に向つては全然何等の影響を及ぼさない。従つて斯くの如き條件の下に起る諸現象は是等二個の力の干涉以外の原因に依つて説明されねばならぬ……資本主義的生産の眞の内面的法則は明かに需要供給の交互作用に由つては説明され得ない……惟ふに是等の法則は需要供給が作きを已める、即ち一致する時に始めて純粹に實現されて來るからである。需要と供給とは實際は



決して一致するものではない、又よし夫がいつか一致しても、夫は偶然であつて科學的には零に等しきものである。然し經濟學に於て供給と需要とは一致するものと假想されてゐるのは何故にか？ 蓋し諸現象をばその合則的なる、その概念に對應する形態で觀察する爲である、即ち諸現象をば需要供給の運動に由つて惹起された外觀とは無關係に觀察する爲である」と。(註)

(註) 『資本論』第三卷一六九頁

扱て斯くの如く競争を單なる「外觀」に還元すること自らが外觀に外ならざるは明白である、何故ならば斯くの如き、洵に漠然たる推斷に基づいて築かれた議論は、マルクスがその他種々の場所で倦まず繰り返へしてゐる所であるが、同様に反對の結論に利用され得るし、さうする時その反對の結論は夫自一層大なる蓋然性を取得るからである。需要と供給は、有効なる需要が、有効なる供給に等しいと云ふ意味の需要供給の一致は、元來、如何なる價格状態にも起る同義語疊

用的なる規制である。若し反對に供給と需要に一切の價格決定の條件を總括するならば、需要と供給は決して一致しない、市場價格通りの販賣の場合にも決して一致しない。結局是等二個の力の平衡状態は「此の兩力の干涉以外の原因に由つて」初めて説明せられるであらふ(註一)と云ふことは、夫自體如何にもあり得さうになく、従つて寧ろ丁度その反對が機械的類推と考へられる位である。ベーム・バゼルクが是等の諸點に對して凡ての必要事を論述したに對して、ヒルファデングは彼の反對を述ぶるに何等本質的なるものを述べる事が出来なかつた(註二)。

(註一) ベーム・バゼルク『マルクス體系決算』一八一頁。

(註二) ヒルファデイング『ベーム・バゼルクのマルクス批評』五八一—五九頁。

その唯物論的立場は實はヘーゲルの思索に對する實證主義的反動を表はすのだと云はれるマルクスが、今價值論の領域に於ては一切の歸納的知見を超越する形



而上學を代表せんとするは洵に驚くべきことである。併しマルクスに在つてはその他の點に於ても屢々然る如く、此の場合にも彼の辯駁的意圖から創製された術語が彼の眞の學問的態度と彼の結論をも改悪してゐることは明である。彼の價值論『自體』<sup>アンゼツヒ</sup>は彼の意識に上つたものとは全然異つたものである。何故なら夫の『價值の自働』なる言葉に表現された形而上學なるものは、彼が競争の解剖に於て、競争の『像偶崇拜的觀方』に反對して飽くまで固守せんした所の新しい社會的立場の一種の誇張であり非常に拗ねた説明に過ぎないからである。『競争のみが市場價格と市場價值との相違』を説明すると云ふのであるから、競争を觀察圏外に排除する所か、マルクスは寧ろ競争をば全價值の凡ゆる具體的分配關係の闡明に援用してゐるのである。嘗に資本家と勞働者間の全價值の第一次的分配が競争の一結果であるのみならず、剩餘價值の分配、平均利潤率の形成も排他的に個々資本家の動機系列から説明し得られる。『價值法則』は結局マルクスの全體系に於て

全然廢せられてゐる（さればこそ資本と勞働との交換に於ても價值法則は獨り人為的構造を通じてのみ支配するのである）が併し『價值觀察』は終始貫かれてゐる。若し今資本論第三卷に於て到達された立脚點に立つて全體系を振り返るならば、『價值法則』と『價值觀察』てふ二元論に於ける一切の曖昧朦朧は消散して了ひ、そして第三卷に於けるマルクス體系の難船、瓦壞は斯くて却つてマルクス獨得の思想内容換言すれば夫の『價值觀察』及び夫に伴ひ『社會的』出發點が全く純粹に展開せられてゐる眞の頂點として現はれて來る。第三卷が第一卷と矛盾するに非ずして却つて第一卷が第三卷と撞着してゐるのである。以下之に就て更に精く論せねばならぬ。

### 第九節 資本論第一卷と第三卷との關係

世人はマルクスの價值學說をばヘーゲルの絶對的精神の自發自展說の經濟的改



竄と呼んだ。『剩餘價值と企業利得、利子、及び地代との關係はヘーゲルの理念と國家及び社會との關係と同一である』(註一)と。實際彼の價值説はその冥想的な表装を見ると、エンゲルスがマルクスと相携へてパウエルを撃駁した『神聖なる家族』に於て彼自ら批評したヘーゲルの觀方に類似してゐる。即ち『歴史は何一つ自らすることはない、歴史は「決して尨大なる富を持たぬ」、歴史は一戦でも自ら戦ふことはない！ 何事でも爲し、所有し、闘ふものは寧ろ人間である、現實の、活潑々地の人間である。人間を利用して自己の——宛も人間の變種でもあるかのように——目的を遂行するものは「歴史」ではない、歴史は自己の目的を追進する人間の活動以外の何ものでもない』(註二)と。今此の歴史と人間との代に價值と資本家を置いて見るがい、然らば是等價值説の創始者自身の唇から彼等の冥想的價值説拒否の叫を聴くであらふ。

(註一) プレンゲ『マルクスとヘーゲル』一五八頁。

(註二) 『マルクス・エンゲルスの文献拾遺』第二卷一九五頁。

マルクスの相對的剩餘價值論は、斯の如き價值の自働に關聯して得らるる教訓に富む實例を呈示してゐる。夫の價值自身がその形態變化に於て或は商品として或は『進行的、自働的なる實體』としての貨幣として現はれるならば、資本は更に夫以上に、自ら價值を増殖する價值として現はれる。夫が勞働時間の延長に由ると或は必要勞働の減少に由るを問はず、此の、剩餘價值を作出せんとする、自ら價值を増殖せんとする目的は、資本固有の生活衝動として現はれ、資本家はその資本の意志能力ある奉仕者である、蓋し、彼は「單に人格化された、意志と意識とを賦與された資本」であるに過ぎず、その中にある『自働機械が意志と意識を備へてゐる』のであるからである。されば勞働力の價值を減じ、隨つて勞働の相對的分前を減する所の勞働の生産力増進に由る相對的剩餘價值の作出も全く夫の資本の内在的衝動の發露に外ならず、此の衝動に由つて説明せられ、此の衝動に



由つて惹起せられたものとして現はれる。併しマルクスは自ら斯くの如き一般的结果は各個々の場合に於ける結果及び目的でない論じてゐる。實際斯くの如き事象の基礎を爲すものは、寧ろ技術的そして組織的改善に由つて生産物の市場價格のその生産費を超える剰餘を益々大ならしめんとする個々の資本家の奮闘努力である。従つて、此の故意には企圖せられぬ、個々の資本家には全然知られぬ、彼等の行爲の結果は、獨り特に『價值』觀察に向けられた眼光を俟つて始めて闡明せられる所である。「或る一個の資本家が労働の生産力増進に由つて、例へばシヤツを廉價に販賣する場合、必然に労働力の價值を、従つて必要なる労働時間をば夫丈け減せんとする目的が彼に想ひ浮ぶのでは決してない、併し彼は結局此の如き結果に資するに非ずんば、剰餘價值の一般率引き上げに貢獻することは出来ないのである。此の資本の一般的、必然的傾向は是等の傾向の現象形態とは區別されねばならぬ」(註一)此の場合此の用語が現實に考へられてゐる矛盾相違を表は

すに如何に不適當なるものであるかが判る。即ち此處に問題は競争をば一般に一定の原因として排斥することではなく、競争の觀察及び因果的解剖は競争その者に含まれざる或る着眼點の下に於て起らねばならぬと云ふことである。響に單純なる交換の解剖に際して、社會的觀察に照して本質的なものと映するもの、撰擇が、多様な關係渦中に置かれた『財貨』を『價值抽象』へ還元することに由つて得られたならば、今、資本主義的生産時代の指導的な社會的生産關係が表現される所の剰餘價值形成に對する關聯が競争の解剖に指針を與ゆると云ふのは、實は斯の如き觀點の一段の發展に過ぎない。今や如何に資本家の目的行爲——尤もその心理學ではマルクスもその他の人々と同じく毫も夫の曖昧にして抽象的な經濟人を脱してゐなかつた——が剰餘價值形成に反響するかを討究せねばならぬ。剰餘價值の概念には、従つて資本の『内面的本質』として先驗的に與へられたる着眼點が存在し、『資本の外面的運動』の具體的因果的研究も夫に由つて指導せ



られるのである。故に若しマルクスの形而上學的なる被包オホヒや似而非なる類似を無視すれば、吾々は以下の如き彼の言明を理解することが出来る。「資本主義的生産の内在的法則が資本の外面的運動に於て現はれ、競争の強制法則として勢力を逞ツヨクふし、從つて動因として個々の資本家に意識せらるゝ態様は、今此處に觀察することは出来ないが、併し之だけは既に最初から明なものである、即ち、競争の科學的解剖は此の資本の内面的性質が把握せらるゝ時に始めて可能である……夫は宛も天體の外觀的活動が天體の眞の併し感覺的には認識し難い運動を識つてゐる者でなければ理解出来ぬと同一である」(註二)。

(註一) マルクス『資本論』第一卷二八〇頁

(註二) 吾々の見解はヒルファディング『金融資本論』二〇一頁)と極めて接近してゐる尤も假令此の見解が彼に於ても結局再び形而上學的に方向を轉換してゐるとするも。即ち『資本家的經濟學は絶えず經濟的行爲の社會的諸機能とその行爲者の動機とを混同し、是等諸機能の實現を以て此等行爲者の動機と誤り解してゐるが彼等は之に就ては何等與り知る所はないのである。(宛もマルクス主義者も屢

とやらないこともなかつた如くに!)故にブルジョア經濟學は經濟學の特殊の問題を見ない。即ち據つて以て社會的生活が擴充せられねばならぬ經濟的行爲の機能的關係をば全然他の動機の結果として説明し、此の必至なる機能その者から資本主義的生産者の誘因を理解すべき特殊の問題を見ない。

以上述ぶる所に由つて、マルクスが實際の競争に對して、上に引用した言明から想像されるものとは全然別個の地位を容認した事情が呑み込めると、此の關係は第三卷の平均利潤率の構成の條クダリに於て一層顯著に現はれる。是迄論じた所ではリカルド流の『價值法則』に對抗して價格現象の社會學的解剖の手段としての價值觀察の區別及び一方的摘出が果して一貫し得たか否か猶ほ疑問であつたかも知れぬが、今此の第三卷生産價格の構成に於ては此の傾向が極めて純粹に且つ獨立に炳乎として貫かれてゐるので、生産價格の構成は斯くの如き吾人の解説を前提して始めて漸く一の合理的なる意味を取得する。夫の有名なる第一卷と第三卷との矛盾に關して持ち上つた夥しい抗議に對しても、吾人の見解を以てすれば人は必



すしも正當なる點にその論争を向けなかつたと思ふ。マルクスの反對者が、資本論第一卷に於て設定せられた、商品は商品中に包含せられてゐる労働時間の比率で交換せられると云ふ價值法則は生産價格を標準とする交換に由つて止揚せられておる、そしてマルクスの全體系は此の調和し難い、假令彼のシヤエンアルギメント 伴論を以てするも除去し得ざる矛盾の爲に崩壊すると云ふことを證明せんと力めたに對し、マルクスの信奉者はその正反對を主張し、價值法則に『幾分の修正を施して』夫は生産價格をも支配するものと説明するを以て甘んじた。併し乍、猶ほ中間の態度も可能である。即ち、斯くの如き矛盾が存在することは認めるが、之を以てマルクス體系が片附けられたと見ず、されば第三卷に於て價值法則の拋棄に不拘猶ほ夫の價值觀察を確保する時は如何なるであらふかを問題とする中間の態度も可能である。

第三卷に於て『價值法則』は完全に止揚せられており、従つて此の概念が如何に

親切に註釋せられてもその『修正』は妥當するものと認められ得ないと云ふ事が論争されたとすれば、夫は全く人々が『價值法則』と『價值觀察』とを無差別に交互せしめた爲に前者の拋棄に由つて後者に置かれた豊富なる社會學的结果までが危険だと見たからに外ならぬ。マルクス及びその信奉者が據つて以て第三卷に於ても價值法則は『修正せられた態様』に於て存続する所以を立證せんとする所の議論を注意すれば、夫等は悉く前提と結果との著しき混同に依存するものである。前提は『社會的立場』に由つて與へられた一定量の總價值なる出發點に在る、尤も此總價值の資本主義的生産方法に由る、個々の社會階級間に於ける分配は生産價格の構成に由つて説明せられねばならぬが。扱て此の分配が如何にして、如何なる力に由つて行はれやうとも嚮の前提に従ひ諸の價值量から成る生産價格の總和は分配行程に投げ込まれた全價值量と一致しなければならぬと云ふことは何等價值法則の支配を確證する結果ではない、夫の前提の繰り返しに過ぎない。同じく、



夫だからと云つて、生産價格は價值量の總和である、謂はゞ全價值が價格の諸要素に對して一定の限界を指摘するが故に、生産價值は、價值法則の支配下にあるんだとも云へない。何故ならば問題の重點は、無限に多數のコンピナチオン聯結を許す所の、マルクスが決して價值法則からせず、却つて競争の一定の事情から演釋した全價值の分配に在るからである。若し斯くの如き分割の個々の段階を觀察すれば、生存の最低限度に由つて決定せる勞銀と剩餘價值への最初の根本的分配はマルクスが可なり無理な構造を用ひて辛ふじて『價值法則』の下に包攝し得た勞働の價格構成に依存してゐる(註二)。實際資本關係カピタルフェルヘルトニスの社會學的特徴を示す要素こそは等しからざる勞働量の交換に存するとして此の交換比率を決定する力は價值法則ではなく競争である。斯くて全價值から一部分が取り除かれた後の問題は、殘の剩餘價值を企業家、資本家及び地主へ分配することである。従つて、是等の價格成分總和は全價值に等しからねばならぬので、利潤及び地代には一定の合則的

限定が與へられてゐると云ふことは前回と同じく決して『價值法則』を確證する所以ではない、唯此の問題の諸前提の説明に過ぎない。何故なれば、價值法則は全く價值觀察の出發點に存する、一切の財貨を單に勞働生産物と見んとする要請を超越し、勞働生産物の分配に就ても何事か命令せんとするからである。斯の、平均利潤率に由る剩餘價值分配の如き矢張夫は競争である、而も、特殊—資本主義的形態に於ける競争である、即ちより一層嚴密なる意味に於て『價值法則』と矛盾する結果嘗つて勞働の價格構成に於て説明せられず済まされたものが今や公然と承認せられる(註二)が如き『合律的』結果を齎す利潤率の平均傾向である。吾々は此の觀方を之以上地代の決定又は利潤の企業利得及び利子への分配にまで及ぼす必要はない、何故なればマルクスは此の場合に價值法則と何等かの關係を確保せんとする企圖さへも拋棄してゐるからである。吾々は今や十二分に、マルクス及びその學徒の、『價值法則』は第三卷に於ても修正せられた仕方であ當する



と云ふ見解が如何に完全に謬つてゐるかを認識する。是等の證明が據つて以て立つ所のものは『價值法則と價值觀察』との混同に依存してゐる。その後者に置かれた方法的前提は、嘗つては、競争に由つて設定せられた價格關係の物的外皮を引剥ぎ、價格を勞働關係に溶解することに由つて價格の社會的内容をさらけ出すべき『社會的出發點』の一結論として發生したのであるが、今や併し再び一の實在的過程に變へられ、同時に一の新しい偶像禮拜が産み出された。即ち單に主觀的な認識條件なるものが客觀に於ける一の實在的事象と映するのである。斯くてマルクスは魔術性論に存する、そして勞働價值思想を社會的觀察を初めて構成する主觀的認識條件に變へた所の出發點を再び曖昧ならしめ、一の獨斷的立脚點と交換して了つた。併し若し此の主觀的錯誤を暫く問題にしなければ、正しく第三卷を俟つて始めて斯くの如き社會的觀察の特質は明かになる、且つ假令形式上は此の價值と價格との連絡に付て種々の批難があり得るとするも、第三卷の問題提供

には眞に獨得、且つ清新なるものがある。大抵のマルクス批評家が『價值法則』の立場から正當に矛盾と考へた競争と勞働價值説との聯結は如何にも上段に述べた如く、今やに『量的價值問題』の一貫せる説明として現はれる。マルクスは第三卷に於て資本主義的競争の制限的影響の下に如何なる比率に於て『使用價值』が各種階級間に分配せらるゝか、従つて如何なる社會的關係が個人自身には意識せられず資本家の私的努力の結果として生ずるかと云ふ問題に對して答を與へようと思つたのである。マルクスは資本主義的競争の價格形成をばその社會的内容から檢覈する。

(註一) 之をオツペンハイマー(『社會問題及び社會主義』)の批評と比較せられ度い、曰はくマルクスの剩餘價值の構造は、賃借契約に於ては勞働力(即ち勞働能力)の購買は起らない、單に賃借契約が起るに過ぎない、此の購買は時間で計られた勞働給付に及ぶのみであると云ふ點で蹉跌してゐると。價值に關するマルクスの概念拘泥癖に對照して此の何方かと云へば形式主義的な批評は如何にも得たものである。



(註二) 又價值法則の出發點は單に計算し得るものに過ぎない。此の出發點はその場合、一定の標準状態として作用し、事實上の状態はその變化として現はれる。

## 第十節 社會的に必要なる勞働

量的價值問題に包含せられてゐる所の價值思想と競争との化合は『社會的に必要なる勞働』なる概念に於て一の廣汎なる表現を見出した。『社會的に必要なる』勞働は、明に單純なる商品生産の内部に於て據つて以て交換せられる比例に對して標準を與へるものである、マルクスは之を定義して『現存の社會的—標準的生產條件及び勞働の熟練及び強度の社會的平均程度を以て何等かの使用價值を現出するに必要な勞働時間』と。併し他の箇處では(註)マルクスは斯くの如き純技術的定義の範圍を遙に踏み越へてゐる、蓋し彼は、夫は寧ろ量的に限定せられた社會的欲望の満足に必要な、夫を標準に財貨の交換比例が整へらるゝ勞働時間

であると云ふ條件を追加してゐるからである。従つて此の場合では欲望が、競争が最後の決定要素として現はれる。即ち使用價值は常に完全に普遍的に價值の前提として現はれる許りでなく、量的に一定せる社會的欲望は甲又は乙の生産部門に使用せらるべき勞働の規模を定め、之に由つて常に生産量のみならず、個々の生産物の價值をも定めるのである。

(註) 『資本論』第一卷七一—七二頁第三卷第二冊一七五—七六頁剩餘價值論第一卷二三三頁

斯くの如く限定的要素としての『社會的欲望』に關聯することに由つて社會的に必要なる勞働概念を擴張する事は、何故に社會的に必要なる勞働時間を一般に使用價值であるてふ凡ての價值の一般的前提の正確なる定式とせんとするのか知らないが(註)、マルクスの價值を一種の客觀的に作用する能因と見る立場にとつては矛盾と映するに相違ない。併し斯くの如き觀方が競争の任務を過當に拒むのは、宛もその正反對の極端に陥れる觀方が凡て競争に由つて確定された價格は、



事實上使用された勞働に依存せず、寧ろその時々々の社會的欲望充足の爲に必要な  
る、夫が量的決定は同じく競争に由つて規定される所の、勞働に依存せるが故  
に、價值と同一物であると主張して競争を過當に評價すると揆を一にする。斯く  
てランデは價值と價格の分岐の凡ゆる可能性をば拒むが如き明白な誤りをやつ  
た。是等二個の觀方は同一の議論に由つて辯駁することが出来る、即ち社會的欲  
望の充足が何を意味するかを精密に規定しなくとも、單に一般商品が賣らるる以  
上、如何なる價格状態にても斯くの如き見解を云々することが出来るのである。  
故に超過生産の場合にも、社會的欲望の充足があれば、商品は常に『社會的使用  
價值一般』たる條件に適合するのであつて商品は孰の見解に従ふも價值を完全に  
實現するに相違ない。

(註) グリゴロヴィッチ『マルクス及びラッサールの價值論』

量的に一定せる欲望が使用せらるる社會的に必要な勞働の量を、夫に伴ひ又

價值をも決定すると云ふことは一般に何を意味するかを問題にするならば、吾々  
は先づ『社會的欲望の充足』の諸條件を確定するのが順序であらう。併しマルクス  
の見解を以てすれば若し社會的總勞働力が、需要供給から結果する價格が財貨中  
に包含せられてゐる—夫の最初の技術的意味に於ける社會的に、必要な勞働と  
正比例するが如き割合で、個々の生産部門に排列せらるるならば、各種の商品種  
別に對する特殊の社會的欲望は『充分せられた』ものと見做されるのである。従つ  
て社會的欲望なる定式の追加に由つて交換關係はその量に於て毫も變化を被らな  
い。その限に於て、矢張り獨り技術的に必要な勞働量のみが問題であるとする  
觀方は正しい。併し夫の曖昧なる、社會的に必要な勞働の二重意義に秘められ  
てゐるものは、斯くの如き交換關係が實現せられる諸條件の精密なる規定、即ち  
社會的に必要な勞働は何等積極的に作用する原因ではない、競争の動搖の眞只  
中に於て實現せらるる結果であると云ふことである。斯くて吾々は此の場合にも



吾々の量的價值問題の觀方が正しいことが立證されたのを觀るであらふ。

### 第十一節 マルクスの價值論と限界效用説

吾々が上來爲して來たマルクス價值論の記述振から見れば宛も吾々はマルクスの價值論と限界效用説との一致を可能と考へる見解に左袒するかの如き觀があるかも知れぬ。斯くの如き見解は種々の方面から發表されてゐる(註)。併し夫は、マルクスが使用價值と競争を彼の問題提供に引込んだと云ふ事實を參酌した若干の漠然たる暗示を一步だも出づるものではない。彼等が遂にマルクスと限界效用論者との關係を明快に捕捉し得なかつたのは、労働價值觀察の方法的意義を支配する曖昧の爲に全然誤つた箇所的一致點を求めたるが故である。何故なれば、若し統一せらるべき矛盾をば主觀的及び客觀的價值論の差違に歸着せしめ、ディーツェル及びマーシャルの所論の方針に従つてその調和を求むるならば、夫は論題

を全然誤つた點に固定するものであるからである。客觀的出發點に非ずして社會的出發點がマルクスの特色なのである従つて此の出發點と主觀的價值論との關係如何が問題となるのである。

(註) 例へばベルンシュタイン、ハムムツヘル、フォン・シュツループを參照せられ度し。

確に此の「社會的」出發點がマルクスの價值論を他と區別せしむるものであることは既に屢々繰り返へし強調した所である。ヒルファディングがベエムに反對して「經濟學に於ける心理學派の代表者は此の社會的關係を氣附かないのである。その代表者は従つて必然に、國民經濟現象の社會的制約の發見を目的とし、従つて社會出發點として個人からは出發せぬ學説を誤り解するのである、云々」(註一)と論するならば彼は全く此の點にマルクスと主觀主義者との越え難い反對を求めてゐるものである。又「社會的」立場と「客觀主義的立場」とは分離せず相互に抱合してゐると爲すゾムバルトも同じく此の點にマルクスと主觀主義者との反對を



見てゐるのである。即ち「之を要約すれば次の一語に竭きる、即ちマルクス經濟學の特徴は一の極端なる客觀主義である。マルクス體系にはケネーに發祥して、リカルドを経て更にロードベルトスに及べる思潮が注ぎ込んでゐる。即ち經濟社會を出發點として再び之に歸着し、結局個人經濟及び經濟事象を決定する社會的事情を發見せんと試むる、嚴格なる客觀主義的なる經濟生活の觀察方法之である」。茲に於てか、マルクスをして主觀的價值學派の個人主義的出發點と對隅關係に立たしむべき、社會及び社會的關係の概念が解剖せられるのであるが、此の反對は、茲に社會的なるものが捕捉せられてゐる意味に就て存在するのではない。寧ろ、此の反對はヒルファディングが感附いてゐたには相違ないが、明快に現はさなかつた全然別個の方向に存するものである。故に吾々はマルクスと主觀的價值學派との關係を理解する爲には先づ吾々がマルクスに於て本質的なる社會的出發點に非すと觀るものを確定しなければならぬ。

(註) ヒルファディング『ベーム・バエルクのマルクス批評』五一—五二頁

社會なる概念はマルクスに於て重大なる役割を演じてゐる、而も夫は彼にとつて種々の事柄を表はしてゐる。その場合、單に大衆的事象をば社會的と呼べるは最も素朴なるものであつて、其處には階級構成に對する社會心理學的註解も在る。稍々複雑なるものでは社會的なるものを平均的なるものとする觀方である、この場合マルクスは屢々ケトレーの平均的社會人説を引證してゐる。此の場合平均的なるものは先づ單に純代表的なる、計算出来る量として現はれ例へば社會的——即ち平均的なる資本の結合の概念に見るが如く、實在的事情とは必しも係はりはないが、他方に於て、眞に社會的なるものとしての平均的なるものの表象はその意味が擴張されて、平均的なるものは個々人の種々なる交互作用の成果と觀られ、従つて夫は價格決定に於ける競争の法則に完成せられた如き、超個人的なものの表章、即ち個々人を支配する關係に歸着する。斯くてマルクスは競争を



描破して、『夫は、各個の場合を觀れば、偶然に由つて支配されてゐる範域なるが、是等の偶然の中に貫徹せられ、そして是等の偶然を規律する所の内面的法則は是等の偶然が大量に綜括せられる時始めて認識し得られるので、生産の個々の代表者自身には遂に認識せられず、又理解せられずして終るものである』と云つてゐる。他の箇所ではマルクスの所論は一層獨特なものである(註二)、即ち「……：社會的勞働の分配、並にその生産物の交互的補償、即ち新陳代謝、社會的動力機關への服従及び挿入は個々の資本主義的生産者の偶然的なる、交互に相止揚する驅使に委せられてゐる。是等の資本主義的生産者は單に商品所有者として對立し、各生産者は彼の商品を出來る丈け高く販賣せんと企てる(よし外見上は彼を生産その者の統整は彼の專斷に委せられてゐるとするも)が故に此の内面的法則は、夫に由つて諸の差異が相對的に止揚せらるゝ彼等の競争、彼等相互間の交互的壓迫を通じてのみ貫かれる。此の場合單に内面的法則、即ち個々の要因に對す

る盲目的自然法則としてのみ價值の法則は作用し、生産の社會的平衡は生産の偶然的なる飛躍變動を通じて貫かれる。』

(註一) 『資本論』第三卷第二册三六五頁

(註二) 『資本論』第三卷第二册四一七頁

扱斯くの如き、『個々人の意志から獨立せる經濟的諸條件』、即ち個々人の意志決定を條件し、その意志決定を左右する社會的關係の探索には併しマルクス獨得にして彼と主觀的價值論とを區別する特徴は毫も存在しない。蓋し、夫の主觀的價值論にとつて超個人的なる、個人を條件する關係が未知なるものでないのは、宛も他方に於てマルクスが、經濟的社會生活の解剖は常に最後の要素としての個々人に歸着するなる『原子論的』出發點に於て主觀的價值論と揆を一にすると同様であるからである。マルクスに於ける競争の強調は明に結局『方法論的個人主義』(シユムペーター)を出發點とするものなるが故に彼を他と區別する社會的立脚點



は全然別個の方向にあると云ふことになる。既に上段に述べた如く、成程マルクスは一種の超經驗的なる、個人の思慮を絶した因果系列を擲擧したが併し事實上彼に取つて競争及び夫に伴ひ個々の個人は最後の動かす力である。此意味に於てマルクスの社會は、主觀的價值論の社會が個々人の總和であると大して變りはない。

他方主觀的價值論はその、客觀的なる、個人の意志から引き離された、此の意味に於て『社會的』なる關係を發見せんとする苦心に於ては決してマルクスに劣るものではない。夫は遂に、シユムペーターに由つて定式された、價格の相互依存關係、即ち自由競争の體系内に於ける一切の價格、價值及び財貨量の數學的に決定し得る依存性の原則に完全に普遍的にその最も精密なる表現を見出したのみならず、限界效用論はその價值の根本論を展開する時、孤立せる、心理學的主體から出發する。そしてその最初の、最も重要な前提たる、財貨の量を増せば魅力

或は愉懌遞減の法則が經驗的心理學の認識にその自然科學的基底を有するが如く、此の如き純自然科學的反社會的内容も亦自ら夫から引き出された諸原則に變はる如くである。限界效用論者の自然主義的基調及び彼等の價值法則の永遠なる、凡ゆる歴史的發展を超脱せる妥當の意圖を喚び起したものは決して此の如き、自然科學的規律から借用された出發點ではない。且つ今や此の價值法則そのものは根本に横はる心理學的根本事實とは全然別個の意味に於ける『心理學』である。夫は、一定の意志格律を基礎として換言すれば最大なる效用獲得の追求の下に、常に清新なる、特殊化的中間地位を通じて合律的、目的論的關係の一系列に展開される合理的なる目的關係である(註一)。然る時即ち斯の如き目的論的意志關係に於て夫の『心理學的根本事實』は單に認識として始まるに過ぎぬ。ペームバエルクの言葉を藉れば、『主觀的價值の全理論は全く何時、如何なる事情の下に、幾許量人類の厚生は財貨に依存してゐるかに關する一の偉大なる決疑論に外なら



ない。主觀的價值論と一切の自然科学的、經驗的心理學との方法上の區別は斯くの如き、『價值法則』の目的合理的構造の洞察に基づくとするも、ヒルファアーディングが幾分ながら説明した如くに、マルクスと主觀的價值學派との區別は依然として存在するかも知れぬ。即ち「經濟的、社會的關係の代に夫（主觀主義的觀方）はその體系の出發點として人間と物との間の個人的關係を擇んだ。彼は斯の如き關係をば心理學的學立場から一の自然的な、不易の法則に従ふものと觀た。』（註二）斯くの如き觀方は實際限界效用論者の措置に於て支持を見出すものの如くである。蓋し彼等の客觀的交換價值、即價格説は正しく人間と物財界とが對立せる孤立經濟の觀察に於て獲られた諸結果の讓渡でありその精密なる類推であるが如くであるからである（註三）。今一切の法律的なる、及びその他の社會的秩序とは無關係に費用法則或は補足的財貨の價值形成が純粹に主體の内面性から演釋せられ、從つて個人は或る意味に於て主宰者であつて僅に圍繞する自然の事實に服從

するに過ぎない如くに、是等の事情を、價格論へ移すならば、そこに全く同様の費用法則或は歸屬問題が成立つが、此の場合にも、斯くの如き個人主義の地位は承認せられ隨つて個人を超越せる、個人の協働から發生する特殊の社會的事情は拒まれたかの如くである。更に斯くの如き印象は始終價值事象と價格事象との間の平行を確保せんと努め、隨つてのみならず往々社會そのものを欲望を有する個人と假定するが如き誤まつた類推に陥る所の殊更さうした術語に由つて一層強められる。

（註一） マックス・ウエーバー『合理的社會學の若干範疇に就て』（ロゴス第四卷三）

（註二） ベーム・バグエルク『マルクス批判』六一頁

（註三） 之とシュトルツマンの國民經濟學の目的に於ける教訓的對立とを比較せよ

今少し仔細に見る時人は、斯くの如き一見極端なる個人主義の出發點は單に外觀に過ぎずして、價值論から價格論へ移り行くに伴ひ限界效用説は、先づ何より



マルクス主義の理論に比して毫末も劣らぬ程度に於てその説をば「社會的に」顯現せしむる所の諸要素を一切吸取してゐることに氣が附くであらう。何となれば、價格形成に於ける個人の協働は、同時に主觀的價值論の價格の諸法則にも同じく一種相對的なる、歴史的に條件せられた特質を賦與する所の一定の法的秩序を前提して始めて遂げ得らるゝからである。若しベームバゼルクが社會主義國家にも利子があることを證明せんとするならば、夫は、自由競争の前提に基づひて説明せられた價格事實(現在財と將來財との價值分岐)をそのまゝ一躍社會主義的社會の全然別種の法律秩序内に取り込むのであるから、未だ證明せられざるものを證明の根據とするより外に仕方はない。併し此の歴史的に條件せられた特徴に對して、主觀的基礎に基づいて獲得せられた價格法則に於ても社會的なる、個々の個人を包括する關係てふもつと重要な要素が現はれてゐる。既に單純なる價格形成は凡ての平衡價格をば、各人が制約せられた分枝として並に制約する分枝とし

て排列せられてゐる一の社會的關係の產物たる所の限界價格として表はしてゐる。併し乍、夫の費用法則にはより一層斷定的なる社會的關係が貫かれてゐる、尤も此の費用法則の基礎附けを得んとすれば、ベーム・バゼルクはマルクスや古典學派と全く同様に平均利潤率の假定に溯るを要するが。何故なれば創造的なる生産力をば個々の生産部門に對して需要供給に結果する價格が企業家一般に平等なる利得ゲインの機會を提供するやうに分配することは、如何にベームバゼルクが彼一流の術語の巧妙なる使ひ別けに由つて吾々に夫を信じさせやうとしても、社會的經濟は全體としては、孤立せる個別經濟がすると同様の仕方でその財貨量を處分するが故に、之を以て夫の「限界效用なる大法則」の一の應用事件と云ふことは出來ない、斯の如き分配を惹起するものは謂はゞ繼子扱ひされてゐる。機械仕掛カラクリの神様の如ふに忽然と現はれる「企業家の商魂ゲシエーフツガイスト」(註一)である、夫はその本質上、マルクスの前提「商品は單純に商品として交換せられず、その大小に比例して剩



餘價值の全量に對する平等なる分前を要求する資本の生産物として交換せられる」(註二)と全く同様の前提を表はしてゐる。併し最後に若し例へばペー・ム・バエルクの利子論の如き特殊な學説を観察するならば、吾々はマルクスに於て見ると同様に客觀的な、「所有者の氣紛」とは無關係な利潤率の諸條件が規律支配してゐるのを見る。よし全然別個の事情に由つて仲介せらるゝとは云へ、マルクスに於て、結局生産技術が利潤變動に對して決定的要素を提供する如くに、吾々はペー・ム・バエルクの利潤説に臨んでも社會的生計基金の總額と労働者數との外に競争に由つて媒介せらるゝ社會的關係並に於て技術的生產關係が利潤の多少に決定的影響を振ひつゝあるのを見るのである。

(註一) ペー・ム・バエルクの『資本論』第二卷四一七頁参照

(註二) マルクスの『資本論』第三頁一五五頁

是に由て之を観るに、マルクスの社會的立場の特異なるものをマルクスは主觀

的價值説が主觀的評價の放肆及び偶然性しか見ない場合に客觀的なる社會的關係を發見したと云ふ風に説かれた主觀的價值論と客觀的價值論との反對と同一視することは適切だとは思へない。若し斯くの如き「社會的條件」なる規範を妥當せしむるならば、應る兩見解の間には何等の反對を見ない、即ち主觀的價值論にとつても價格現象に於てマルクスの見る所と同じく個々人の社會的協働の仕方に起因する諸の合律性が存在するのである。

然らばマルクスの價值論をば「社會的」價值論として主觀的價值論と分つ區別は何處にあるであらふか。吾々は此の社會の問題を原則上二重の仕方の問題とすることが出来る(註一)、そして夫々その執る所の態度に依つて價值論に於ける社會的出發點の要求に於て全然異つた問題提供が起る。即ち吾々は因果的關係の特殊な性質に於て、即ち據つて以て他の事象に對して特殊の社會的事象が限定せらるゝ特殊なる内容上の規範に於て、例へば個人間の特種な交互作用に於て社會的な



るもの、特性を見ることが出来る、が併し又社會的なるものは特殊の方向を有する認識目的に存し、對象の特性に存せず、形式的なる、主觀的觀方に由つて特色づけられた特に方法的出發點に存することも云へる。吾々は上來前者の關係ではマルクスは限界效用論者と特に内容上新なる範疇を以て區別されるものでないことを述べた。吾々は兩者の區別を寧ろ後者の方向に求めなければならぬ。何故なれば、マルクスをして同一なる。「經驗對象」から原理上別個の「認識對象」を抽出せしめ、彼をして交易事象に於て主觀的價值論とは全然別個の表識を本質的なるものとして顯揚せしむるものは原理上別個の方向を採れる認識目標であるからである。

斯くの如き彼の價值論の全然別種の認識目標が何處にあるかは本論の上來論する所に由て既に充分明となつた。限界效用説は交易事象の實在を検するもその單なる存在に着目するに過ぎず、その任務は凡ての點に於て價值を離れて考へられ

る事象の單純なる説明に竭きるが故に、此の意味に於ては夫の交易事象は單に自然關係に在るものと觀られるに過ぎざるに反し、マルクスは獨得なる社會的價值に係はらしめることに由つて交易事象から社會的に重要なものを抽出して、之を自己の觀る所に據つて合理化せんと企て、以て同一の交易事象をばその文化的意義に於て捕捉せんと試みた。如何なる特殊なる、法律に近似せる、とは云へ一定の方向に於て法律とは區別し得らるゝ價值領域がマルクスにとつて、本質的なるもの、撰出を決定したが、然るとき如何にして人間の勞働生産物としての財貨の特質が重きを爲すか、如何にして、吾々が財貨をば勞働生産物と觀る時眞に始めて經濟上の物資が「財貨」即ち文化的意義を有する對象となるかをは既に述べた。故に交易事象の説明が問題である以上、個々の點に於ける差別に不拘主觀的價值論とマルクスとの間には原則上何等の差別も見ないのである。之はマルクスの價值論に於ける主觀的要素を顯揚しマルクス價值論と限界效用論との調和を可



能と考へてゐる人々の齊しく述べた所である。併しそして之こそ兩者を區別するものであるが、此の因果的解剖は、マルクスに於ては、價值に係はらしむる事に由つて摘出せられた、説明を要する複合事實は主觀的價值論が觀るものとは異なるものなるが故に、抑もから別箇の方向をとるものである。説明が「如何にせられるか」ではなくして説明が「如何なるものであるか」が兩價值學派間の反對を基礎附けるものである。

## 結 論

### 第十二節 マルクスの貨幣論

吾々は本論の冒頭に於て所論の對象を狭く嚴定して置いた。蓋し、行論の範圍を、從來余り明瞭に顯はされなかつた、マルクス價值論の或る一面、即ち、あの獨得の出發點、「社會的」範疇の要求を嚮導者とする出發點が表はれてゐる一面の記述に限定し度いと思つたからである。所が、此の如き、寧ろ方法論的な意圖は吾人の解釋が必然に一方に偏り、不完全であると云ふ結果を齎した。蓋し、吾々の積りでは、既に述べた如く、その方法論的構造の決して統一的でないマルクス經論學からは、唯、マルクスの社會的出發點に關する吾人の見解が根據附けらるゝか、或は此の如き見解に由つて新規に闡明せらるゝかするもの許りを明瞭にし



度かつたからである。併し、斯様な措置が決して氣紛なものではないと云ふのは、此の、限界効用説に比して價值現象の社會的方面をより重要視せんとする努力こそはマルクスに基づくものであつて、而も苟も彼の社會的出發點と云ふ特徴にして無視されんかマルクス價值論は忽ち明快を缺ぐに至るであらうからである。斯くの如く方法論的問題が寧ろ主であるに不拘今又マルクスに於ける勞働價值思想應用の事實的吟味に立ち入ることは正に本論の範圍を超ゆるものであるが、併し、マルクスが交易事象を解剖して此等の事象に包含せられた社會的勞働關係に到達したことは、縦しその解剖の方法上の出發點は容認せられるとしても夫が實質的にも正しいかどうかの問題が起つて來る。茲にレキジスがマルクスの分配觀に對して、資本利得は資本家と賃傭勞働者の交換からではなく、資本家と消費者との交換から發生すると云ふ他の見解を對立せしめたと云ふことは、偏へに此の問題の解決如何に懸つてゐると云つて差支へない。果して然らば、勞働階

級の勞働生産物の一部が資本家階級に對して無償で讓渡されるのは、勞力買入の場合ではなく、消費財を賃傭勞働者階級へ賣却する場合に起るのであらう。——又マルクスは生産關係を解剖するに當つて餘に一方に偏つて資本家と勞働階級との敵對のみを考慮したのかも知れない。生産者獨占、金融資本の近代的發達に伴ひ、特に又地代の意義の増重に連れて今や全然新しい生産關係が發生したのかも知れぬ。是等のことは總べて偏へに夫自體正しい原則が嚴密に貫かれるかどうかに係ることであらう。所が更に此の社會的出發點の形式的原則は承認するとするも、その内容的成分たる勞働及び勞働價值のみが獨り交換事象の社會的解剖の正しい手段であるか否かの問題も起つて來る。併し斯くの如き問題は個別科學の領域を踰ゆるもので、況んや、夫の獨得な、マルクスに由つて概念的に明快に限定されるよりは寧ろ直觀された、法律に近似せる、『社會的生產關係』てふ社會的價值領域の特質を把握し或は勞働價值に代ゆるに他の先驗的なものを以てするが如



きは、獨り哲學を俟つて始めて可能なことである。併し、萬一是等の問題が何れもマルクスには不利な解決を見ても、斯かる修正はマルクスが社會的現象の思惟の形式に於て要求した徹底的變革に比すれば寧ろ第二義的なものであらう。

所で最初は斯くの如き形式的方面を明確にすることが問題であつた。従つて、今度はマルクスが斯の如き彼の一般的な方法上の觀點をば今個々の問題を取り扱うに當つて如何に展開したかと云ふことが獨り課題と呼ばれ得るのみである。本論最後の章として吾々は之をマルクスの貨幣論に由つて簡単に述べて見度いのであるが、素より此の際透徹した解剖を與へることは覺束ない事と思ふ。

マルクスは、貨幣も、他の經濟現象、例へば交換價值、商品、資本等に於けると同じく、社會的生產關係と見やうとし、貨幣に於て表現せられた人間の勞働に於ける社會的關係を明にしようとする。此の場合も、彼の理論は、正しく貨幣論では今日も猶ほ仲々有力な、「偶像崇拜」、即ち貨幣を以て素材的性質の故に有用

なる物と做し、貨幣の機能を技術的活動の類推に據つて機械的—感覺的方法で把握せんとする「偶像崇拜」に對する反對に由つて支配されてゐる。正しく此の貨幣論及び之と關聯ある、例へば財貨の流通循環等の概念位國民經濟概念の自然科学的色彩——夫は斯學の發生條件から説明せられるのであるが——が露骨に現はれてゐる所はないが、此の點でも全然通説と異つた見解を打開したことは從來未だ嘗つて評價せられざるマルクスの功績である。

貨幣の物的見方、即ち貨幣を、その輸送手段に比すべき一定の效用の故に價值——その價值たるや更に貨幣の使用價值に由つて支持されてゐる價值であるが——を認めらるゝ物とする觀方に反對する點ではマルクスの貨幣概念の取り扱ひは一見クナツプを彷彿せしむるものがある、蓋しクナツプは貨幣の法的構造を力説強調して明白に貨幣の社會的構造を中心點に据へてゐる人だからである。併し、斯くの如き兩者の親和も單に一時的なものに過ぎない。蓋し、嚮に商品の分拆に



際して、社會の意識的組織即ち法制の下に隠れてゐる社會的關係の暴露が課題となつた如く、マルクスは貨幣をも法制的方面からは單に皮相しか捉へ得ざる現象にして、夫の埋もれた社會學的構造の發見を以て任としなければならぬとするからである。

マルクスが、斯の如き、抽象的法律關係の下に自發的に發達する生産關係を人間のその労働に於ける關係と解しやうとすること、商品交換を人間労働の交換と觀て始めて商品交換が社會關係と認識されることは前に述べた所である。マルクスが今又貨幣をも労働關係として説明しやうとし、貨幣をば毫も素材的に區別された使用價值と考へず、素材に含蓄された労働の、従つて労働人格そのもの、一定の社會的形態と考へたのは、上述の如き措置を更に展開し補正したものに外ならない。暫くマルクスが商品の交換行程に含まれた「矛盾」から斯の如き矛盾の展開及び解決としての貨幣を抜き出さうとする辨證的方法を問題外とするならば、

マルクスの貨幣論を理解するには元來二個の要素が重要である、即ち一は貨幣形態その者の性質であり、二は「商品生産」内に於て此の貨幣形態が表現せらるゝ仕方々法之である。

一、貨幣は決して物ではない。各人の労働が爾餘の商品生産者の労働生産物と對立して取得する、一の特種なる形態である。經濟を營む多數人格が彼等の生産物の交換關係を介して一定の條件の下に結ぶ社會的關係である。労働生産物の貨幣形態は他の何れの労働生産物とも等價値である。故にこの他の一切の商品との直接な代替性(是等の商品に含まれてゐる労働の比率に於てする)の性質に由つて、換言すれば、斯くの如き「普遍的等價」としての性質に由つて始めて個人的私的労働は社會的形態を取得するを得るのである。斯くて貨幣形態は生産物内に含まれてゐる労働が未だ普遍的評價を有せざる生産物の商品形態には缺く可からざる相關概念であり補正であるに過ぎない。



二、扱て如何にして各個人の私的労働の生産物に貨幣形態が賦與され得るか。之は原則としては二つの異つた経路を経て起り得る、即ち意識的な官權の意志を通じて、之は結局社會化せられた生産及び同時に商品生産の基礎の撤廢を前提する所の労働貨幣の空想主義に歸着する。組織でなく、無政府状態が支配する商品生産内に於ては獨立なる私的労働に貨幣形態を賦與する第二の方法のみが可能である。即ち社會成員の事實上一致せる意志を通じて、換言すれば、或る特殊一定の商品に含まれてゐる労働に對して、直接なる代替性及び同時に社會的妥當性、或はマルクスの言葉を藉れば『普遍的等價』の性質を賦與する社會成員の『同意』を通じて。『獨り社會的行爲のみが一定の商品を普遍的等價たらしむることが出来る。』(註) 従つて特殊の限定せられた妥當性しか有たぬ商品を斯くの如く認證せられた『普遍的商品』に轉化することに由つて始めて商品は貨幣形態を取得する。

(註) 「資本論」第一卷五五頁

故に此の商品の形態變化は二個の異つた使用價值の素材變化即ち交換として現はれることは既に商品生産者相互間の原子論的行動に由つて基礎附けられてゐる所である。其の場合夫自體動くことなき商品を循環する貨幣商品が出發點として現はれる。『商品所有者が、一の物、金を普遍的労働時間の直接なる存在に、従つて貨幣に轉化することに由つて生産物即ち彼等の私的労働を社會的労働の生産物として表はすと同じく、今や彼等が據つて以て彼等の労働の素材變化を媒介する彼等自身の全面的な活動が彼等の眼には或る物の特殊な運動として、換言すれば、貨幣の流通として映する。』(註) 斯くの如き魔術的な流通概念は、貨幣の社會的構造に對する不完全なる洞察に起因する。マルクスが交易關係の物的關係を一般にその背後に在る經濟主體の社會的關係と觀たことは既に述べたが、同じく此の場合にも夫が特に貨幣の流通に應用されてその社會的性質が顯揚されてゐるのを見るのである。(註二)



(註一) マルクス『經濟學批判』九十一頁

(註二) 斯くの如き『偶像崇拜』が今日も猶ほ有力な學者の間に如何に擴がつてゐるかは、商品流通を時間又は空間を越へてする輸送と同一視するデイトツェルを見れば察知することが出来る。『消費は、夫に先立つ流通なくしては考へることが出来ない。生産は決して夫自體で満足するものではない、生産物は常に消費者の使用領域或は消費領域への通路を見出し、必需の瞬間に出現するを要する。』此の運動は社會經濟學の言葉では傳統的に流通と呼ばれてゐる。此の言葉は、自由なると規律せられたるとを問はず、交易 (Tauschverkehr) と之に伴ふ輸出入が多数主體間に於ける物財の流通として營まれるが如き經濟生活上の状態を言ひ現はすものである。併し孤立して經濟を營む經濟主體も絶えず、流通的行動と名付けられねばならぬ行爲を遂げるものである。此の空間及び時間を隔て、する物財の運動は、競争制度では運送業者及び商人の責任であり、交換行爲の媒介に由つて遂げらるゝが、その本質上孤立經濟の範圍内並に官吏が統制する集産制度の下でも起り得るのである(『理論的社會經濟學』一五七—五八頁)。

貨幣と商品との交換を交換の物質的方面から見て二個の使用價值商品對貨幣の交換とすることは不可である、此の交換の社會的内容から見て同一價值の形態變化フォルムイェツクセル即ち變態 (Metamorphose) と見なければならぬ。『商品と貨幣とはその儘にて商

品その者の對立的形態に過ぎぬ、即ち同一商品の異つた存在方法である。』(註一) 此の商品の變態は商品生産者の社會的地位の變化である、彼の私的勞働が社會的に妥當する勞働の形態を取得するのである。従つて貨幣流通を或る物の特殊な運動と見るは誤謬である。即ち貨幣流通は寧ろ商品の形態變化の反射であつて、その種々の要素、量及び速度に於て此の形態變化に依存してゐるのである。『貨幣流通は、據つて以て社會的素材變化シユトツフエツクセルが遂げらるる商品の變態、換言すれば形態變化の現象に過ぎない……。實際貨幣が流行程に於て保有する種々の形式的制約は商品そのものの結晶せる形態變化に外ならぬので、夫は又、商品所有者が據つて以て彼等の素材交換シユトツフエツクセルを遂げる所の變化しつゝある社會的關係の表現に過ぎない』(註二)。

(註一) マルクス『經濟學批判』百十九頁

(註二) 同百三十五頁百三十八頁



本論の範圍では、マルクス貨幣論の形式的構造のみが問題なるが故に此の如き流通概念の貨幣論や資本論や就中恐慌論に對する意義の全てを充分に展開することは不可能である。茲では僅にその最も重要な結論の中二個を暗示するに止むる外はない。先づ第一に此の商品の貨幣形態を商品てふ變態てふ一の特種な要因とする觀方は、例の、貨幣とは、交換取引の平衡條件及び再生産條件を解剖する場合、その背後に行はるゝ使用財貨の唯一眞實なる交換行程を觀察するが爲には暫く無視するを得る所の包裝的な要因に過ぎぬと見る觀方を排斥する。例へば、セイやゼームス・ミル等に由つて唱導された一般的生産超過不可能論は此の觀方に依存してゐるのである。商品の貨幣形態は非本質的要素として除外されて宛も各販賣者は同時に彼自身の買手をも市場に齎すかの如き觀がある。マルクスは如何にも適切に此の如き見解を反駁してゐるが、蓋しその見解の誤謬は、夫が流通行程を直接の交換に轉化し乍再びその直接の交換に私に流通行程から借り來つた

買手と賣手の人形を潜り込ませた點にあるのである(註)。「商品の最初の變態は賣りであると同時に買ひであるが故に、此の部分行程は同時に獨立なる行程である。買手は商品を得、賣手は貨幣、即ち一種の商品、流通し得る形態を得、夫が早晩再び市場に現はれると否とを問はない。何人と雖他人が買はなければ賣ることが出来ないが、併し何人と雖彼自ら賣つたのであるから直ぐ買ふ事は出来ない。流通は、全く、自己の勞働生産物を換へに出すこと、他人の勞働生産物を引き換へに取るこの間に存在する直接なる同一を引き裂いて賣り手と買手の對立にして丁ふ許りに、生産物交換の時間的、場所的並に個人的限界を粉碎するのである。」今日と雖も斯くの如き見解は、金融市場及び資本市場の解剖に於て屢々見受くる所の、宛も貨幣單位に於て表現せられ、取引せられる資本額には自然的な財貨の貯藏が必然に對應しなければならぬかの如き前提中に生き永へてゐる。果して然らば夫は、宛も資本市場てふ「紙製の世界」の背後に於て取引せらるゝものは、單



に自然的な財貨額に過ぎないかの如き誤まつた假設に陥るものである。夫はさうあるかも知れぬが、さうあつてはならぬのである。若し寧ろ商品の貨幣形態を、貨幣形態が金屬貨幣、銀行手形或はその他の貨幣代用品、何れの形態を採つて現はれやうと、一の獨立な、物質的商體ワレンケルベル（恐らく既に久しく消費に委せられてゐる所の）とは無關係な社會的關係とするならば貨幣市場及び資本市場をその背後にある現實の資本財の商品市場に由つて支持する必要はない。

(註) マルクス『經濟學批判』八六—八七頁

上に述べたマルクスの流通概念からの他の重要な結論は、之も同じく單に暗示し得るに過ぎないが、結局貨幣數量説に左袒するものである。貨幣數量説なるものは、實際は——少くとも固定した、機械的形態に於ては——貨幣は夫自體動くことのない商品を循環する、故に貨幣量は商品價格の先行的能動原因であるとの見解から出發するものである。マルクスは之に對して、貨幣は商品を循環しな

い、却つて商品こそ貨幣を流通するものであると主張する。

何故に然るかと云ふに、價格なき商品と價值なき貨幣が流行程に於て對立することは決してないが故に、相互に測定し難い使用價值の量が國內に存在する貨幣量と交換せられるからである。寧ろ商品は、常に一定の價格を以て、即ち貨幣商品の、同じく獨立な、流通とは最初無關係な交換價值の構成に基づく價格を以て流通に入るのである。『貨幣は他の凡ての商品と同じくその生産の源泉に於ては商品である。貨幣の相對的價值及び鐵の或はその他の商品の相對的價值は、夫等のものが交互に交換せらるゝ量に於て表はるゝ。併し流行程に於ては斯くの如き活動は既に前提されており、商品價格に於ては貨幣自身の價值は既に與へられてゐるのである。故に流行程内に於て貨幣と商品とは直接なる交換取引の關係に立ち、従つて彼等の相對的價值は單純な商品としての彼等の交換に由つて確定されると云ふ思想ほど馬鹿らしいものはない。』(註)



(註) マルクス『經濟學批判』七十九頁

流通手段が價值不定の、單純な量として流通に入ることはないと同じく、商品は、價格なくして流通行程に入ることではなく、貨幣は流通手段として作る前に計量貨幣 (Rechengeld) として既に作いてゐるのである。商品は價格表現に於て普遍的等價としての金に於て始めて理想的に表現せられる。斯くて金は、最初は單に觀念上の貨幣としてしか存在せぬ貨幣となる。故に商品の流通は、流通手段の側から見れば、單に與へられた價格の實現に過ぎない、その價格の高低は流通せる貨幣の量を決定するも此の量が價格の高低を決定することはない。斯くてマルクスは、商品の流通は商品と商品、金との交換ではない、商品そのもの、形態變化である、故に貨幣の流通は商品變形の受動的反射に過ぎないと云ふ彼の一般的觀方から、流通手段の量は商品價格に對して何等獨立な影響を振ふことは出來ないとの斷案に達した。とは云へ之と彼の國家紙幣の價值變動に關する頑固な數量

說的觀方とは矛盾するものではない、何故ならば、『紙幣の獨得な變動は直接商品の變態に由來するに非ずして紙幣と黄金との適當な比例が損はれるに起因するものであるからである。(註)

(註) マルクス『經濟學批判』百十八頁

斯くの如きマルクスの貨幣論の分解は、端なくもマルクスが果して名目論者金屬論者の孰れであつたかの問題を決定する可能性を與へるものである。その答へは是等兩反對說その者の觀方如何に懸つてゐるであらう。併し若し金屬論を以て貨幣價值は結局金屬の使用價值に基づく、換言すれば『實體價值』ズプスタツツヴェルトであるとする見解であるとするならば、マルクスは決して金屬論者でなかつた。如何にもマルクスは貨幣の基礎として商品を要求し、彼の見解を以てすれば貨幣は普遍的商品であるに過ぎないが、併しこの貨幣の商品性は、マルクスに於ては價值の基礎附けにはならない(註二)。寧ろ商品を始めて貨幣たらしむるものが此の商品を普遍的



等價として普遍的通用を獲得せしむるのである。従つてこの特殊な貨幣價值は正しくその素材的特質に依存するものではない、夫とは全く無關係に起る商品所有者の社會的行動に依存するものである。この、特別な使用價值の制約を克服すべき商品の普遍的通用が、夫自身使用價值に依存せんとするも得べからざるは明である。此の關係は寧ろ正反對である。即ち金はその素材的特質の故に廣く一般に渴望される使用價值であるから貨幣たるに非ずして、寧ろ貨幣が商品生産てふ關係から必然に生れ出るものとして普遍的等價なるが故に、夫自體偶然な、而も一定の自然的性質に由つて豫め運命附けられたその負擔者、金が一般に渴望される商品たるのである。此の金の貨幣的特質がゴールドアイムシヤントあつて始めて金が蓄積に適當し、夫に伴ひ金の使用價值範圍が非常に擴大されるのである。「金及び銀は抽象的富の實體なるが故に富の最大の見せびらがしは金銀を具體的使用價值として利用することである、従つて商品所有者が生産の一定段階に彼のお寶を伏せた場合は危険の

ない限り他の商品所有者に對して自分を富豪に見せかけやうと焦せる。彼は自身自身もその家も鍍金する。』(註二)

(註一) 貨幣の價值量は商品としての貨幣の特質に由つて條件されると云ふことはこのマルクスの見解とは矛盾しない。即ち若しマルクスが『交換行程は夫が貨幣に變化した商品に對してその價值を與へず、その特殊な價值形態を與へるに過ぎぬ』と云ふならば、金屬論とマルクスとの差異は全く、金屬論が『價值形態』即ち貨幣の普遍的妥當性を使用價值に基づくと見るに對しマルクスが一致せる社會的行動に基づくと見る點に在る。術語の區々まち／＼であることが兩者の差異を蔭蔽してゐるのである。

(註二) マルクス『經濟學批判』百三十三頁

マルクスの見解を以てすれば貨幣の價值の基礎附けは素材的因果的なるものでなく、社會的機能に根據してゐる以上、夫丈け彼と金屬論との間には意見の開きがあるが、彼は同じ程度に於て極端な名目論とも意見を異にしてゐる。蓋し名目論の見解を以てすれば貨幣は、諸の比率の表示に局限せらるゝ一の觀念的な任意



な價值單位に外ならないからである。此の意味に於て「價值の尺度」たる貨幣の機能、換言すれば、商品に含まれてゐる特殊の勞働を普遍的に妥當するものとして表現する貨幣の機能は、表現手段その者として一の勞働生産物、商品が必要とする。商品生産内に於ては、一財貨に投せられた勞働は未だ何人にも認められたものではなく、競争の社會的過程を通じて始めて表現せられ得るものなるが故に商品の價值表現は若し斯の如き表現が直接起り得なければ、「相對的價值形態」を採らざるを得ぬ。名目論の、貨幣は商品の社會的妥當の比率の尺度として單に觀念的單位に過ぎぬと云ふ思想は、斯くの如き、商品生産内では間接にしか可能ならざる商品の價值表現を誤解せるものである。故に名目論は貨幣を名目論一流の空想主義で一の社會に於て直接結合せられた個人の止揚と解するのである。マルクスが貨幣は商品であらねばならぬと主張する意味は貨幣の普遍的通用は貨幣の素材的性質即ち使用價值に依存すると云ふ意味ではない、價值表現としての貨幣表

現は決して直接なものではあり得ない、競争に由つて媒介せられたるものしかあり得ぬと云ふ意味に外ならぬ(註)。

(註) 之は或る金屬論者の、貨幣は價值を測り得るが爲には自ら價值を持たねばならぬとの見解と混同せられてはならぬ。是等の金屬論者から見れば、貨幣は一の價值であらねばならぬと云ふことは單に尺度の技術的必要に外ならないのであるが、マルクスを以てすれば、社會の組織から生れ出た必然性であるが故に、マルクスに於ける重點は、價值表現は常に必ず競争に由つて媒介せられたものであらねばならぬと云ふ點である。

マルクス流貨幣論の基礎たる、財貨の價值表現は間接的なものでしかあり得ない、交換價值は常に價格にならねばならぬと云ふことは又マルクスの紙幣に對する態度を説明し宣言してゐる。流通手段としての貨幣は、商品變態の行程に於ては單にその果なき貨幣存在を表すに過ぎない以上、シャイヂミユツワエ小錢たる紙幣たることを問はず象徴的なる貨幣と置き替へることが出来る。(強制的に流通する國定紙幣、信用貨幣はマルクスに従へば、特殊の法則に従ふものである。)併し商品生産に於



て商品の直接な價值表現が不可能であると同じく、紙幣は商品の直接な價值記號であり得ない、紙幣は常に貨幣記號であるが、その流通手段としての機能に於てのみである、價值の尺度としては金に取つて替はることは出来ない。「商品に對して價值記號が商品の價格の事實を表象し、價格の記號であると共に價值の記號であるのは一に全く、商品の價值が價格に於て表現せられてゐるからに外ならぬ。W—G—Wなる過程に於て、價格が兩變態の進行的統一或は直接なる抱合として現はれる以上、商品の交換價值は價格に於て始めて觀念的な、貨幣に於ては單に表象せられた象徴的存在を取得するに過ぎぬ。交換價值は斯くて單に思惟せられた或は物的に表象せられたものとして現はれるが、或る一定量が商品に於て體現されてゐる以上、商品自身を除いては何等の實在を持たないのである。故に宛も價值記號は金の記號としてではなく、價格に由つて始めて表現されるが、商品に限つて存在する交換價值の記號として表はれることに由り商品の價值を代表

するかの如き觀がある。併し斯くの如き外觀は虚である。價值記號は即ち價格記號従つて金記號に過ぎない。且つ斯くの如き迂路を経て始めて商品の價值の記號たるのである。』(註)斯くて價值記號は直接商品價值の代表たるを得ず常に金記號なるものなるが故にその價值變動の法則は全然夫と金との關係に依存してゐる、蓋し之紙幣の全額は常に此の全額に由つて代表され必要とせらる、黄金量の價值に還元せらるゝが故である。

(註) マルクス「經濟學批評」一一〇頁

マルクスはその貨幣論に於て名目論と金屬論の孰れにも與せぬ中間的態度を採つたことは既に述べた。尤も彼は紙幣論に於ては金屬論の側から見て必しも此の態度を終始一貫しなかつた如くである。何故なら、マルクスは、果なき流通手段としてののみ、價值記號を以て金に替へることを可能と考へたが、價值記號の貯蓄の媒介や支拂手段や世界貨幣としての機能に於て夫が可能とは考へなかつたから



である。併しマルクスを以てすれば、貨幣の特殊な價值形態、即ち貨幣の普遍的妥當性は、貨幣の素材的性質に依るに非ずして偏へに『社會的合意』に依存するものなるに、何故に紙も亦貨幣をその『靜止せる存在』に於て代表し得ざるか少くとも支拂手段及び銀行準備金の意味の貯金として代表し得ざるか理解するを得ない。(註)亦紙を世界貨幣に代用することの不可能性も、實際的並に組織的理由には基づくけれども彼の貨幣概念の當然の結論ではない。併し如何に徹底した金代替に於ても紙幣は依然として金記號であるであらう、その價值變動に於て一方に於ては金の價值變動に他方に於て流通せる紙幣量と夫に由つて代表せられた貨幣總量との比例に依存する金記號であるであらう。(終り)

(註) 此の結論はヒルファディレグの述べる所である『金融資本論』四十四頁參照

## 序 言

『資本論』第一版の序文に於て、マルクスが、彼の意圖は、既に『經濟學批判』に含まれてゐる價值實體及び價值量の分析を『資本論』に於て通俗化せんとするにあると辯明したのは何人も知れる所であるが、そは主として、ラッサールさへも右の論旨に關するマルクスの説述を理解しなかつたとされたが爲である。此の通俗化は、右の序文中の言葉をその儘藉りて云つて見れば、『ラッサールが此の論旨に關する余(マルクス)の解明の「精神的眞髓」を傳へると聲明せるシュルツェ・デーリッチに對する駁論の一齣すらもが重大な誤解を含んでゐるので』益々必要視されたのである。

此のマルクスの註釋に由れば、ラッサールがマルクスの價值論を誤解したに就ては一點の疑を挟む餘地はない。併し、然らば此の誤解とは抑も何を意味するか



に就てはマルクス自身何にも云はなかつた。その結果、彼は自分の解説者並にラッサールの解説者に對して、彼が確説した丈で詳しく示さなかつた彼の價值論とラッサールの價值論との相違の探求に際して洵に廣大なる活動の餘地を残した。

如何にも最初世人は、マルクスの、ラッサールは余の價值論を誤解してゐると云ふ前掲の註釋は無視して差支へない、そして『資本論』第一卷の出版後でもラッサールの價值論とマルクスの價值論との完全なる一致は固執出來ると信じしたが(註)、徐々に一の反動が現はれてラッサールは實にマルクスの價值論を『誤解』した許りでなく、夫を全然正反對のものに轉化する底の解釋をさへ與へたと云ふ見解が優勢になつた。ラッサールがその『シュルツェ・デリッチ』論に於て述べた價值論は、爾今、實にマルクスの夫と同一でない許りか、正反對である、換言すれば、マルクスの價值論を、マルクスが夫から引き出した結論をも含めて覆し兼ないものと云はれた。

(註) 例へばオイゲン・イエーゲルはその論文『近世社會主義』(伯林一八七三年二四八頁)に於て是等二個の價值論の『完全なる一致』に就て述べてゐるが、唯の一言でもマルクス自身は彼とは別個の考を持つてゐた事に就て費してはゐない。

斯くて此の如き見解は非常に廣く流布し、マルクス流經濟體系の反對者達が此の體系を駁撃するにラッサールの價值論から借り來つた議論を以てするのを目撃する事は稀らしくなかつた。而もその價值論たるや、リカルド價值論の祖述である限りに於て、ラッサール自身の積りでは、カルル・マルクスの論文『經濟學批判』からの『壓縮された思想抽出』たるより以外如何なるものでもなかつたのである。當時責ラッサールに在りと云はれた例の誤解の原因は、ラッサールは一切の價值の源泉としての『社會的に必要な勞働』の概念に就てマルクスと異つた見解を持つてゐると云ふにあつた。此の點は、マルクス價值論の反對者も追隨者も一致してゐた、假令後者が夫に由つて前者と同様の結論を下すことは恐らく警めたど



しても。

とは云へ、マルクスの價值論とラッサールの價值論との相違に關するマルクスの反對者と信奉者との一致は、單にマルクス自ら『社會的に必要なる勞働』概念を如何に解したかと云ふ點に關する一致がある間に限つた。併し乍、此の如きマルクスの概念そのもの、意味が疑はれて來ると——然り、此の問題は今日までも依然として喧ましい問題である——第一の問題に就ても自ら新に論争が燃え上がりざるを得なかつた。そして實際吾々は今日此の問題に就てありと凡ゆる種々様々の見解が文献に代表されてゐるのを見る。或るものは、今日でも、二つの價值論間に於ける相違は『社會的に必要なる勞働』の概念に關する見解の相異であると云ふ。或るものは、ラッサールはマルクスの價值論を全然正しく把握したのだと云ふ舊説に立ち戻つたものもある、そして縦んば『資本論』の序言に於けるマルクスの註釋は之を最早敢へて無視しないとしても、マルクスが云つた『誤解』云々は

全然從屬的なものに過ぎないと云ふ事がいつでも指摘される。中でも一番賢いのは、マルクスの價值論とラッサールの夫とは違ふんだと云ふ事を確説するに止め、此の確説の正當なる事は前述のマルクスの註釋の指摘に依つて證明はするが、此の相違の本質に迄は立ち入らない連中の遺口である、併し又、此の問題に一個の新しい解釋を與へやうとする積極的企圖もないことはない、フランツ・メーリングが企てた試みの如き夫であるが、惜しい哉彼は詳論しなかつたので今日に至るまで十分な尊敬が拂はれないのである。

併し乍、抑もラッサールがどの點でマルクス價值論を誤解したのであらうか、之に關する見解は斯くの如く區々であるが、夫にも不拘是等の見解中唯の一つとして徹底的に充分基礎附けられておるのを見ない。夫等は概して輕々に吐かれた評言であつて、通常世人が既に久しく固定せる事實、即ち最早何人によつても疑はれ得ざるが故に何等詳密なる基礎附けを要せざる事實に就てよく用ひたがる所



のものである。併し實は茲に吾人が提起した問題こそは一番曖昧に取扱はれてゐる問題の一つである。故に吾々は、此の問題を最一度根本的に研討し、此の問題に對して從來拂はれたより以上の注意を拂つても無益であるまいと思ふ。

却說本書に於て吾人は専ら此の問題の解決に従ふ積りであるが、夫は以下の如き實行計劃に據つて行ふ筈である。先づ第一に此の問題に關係ある若干の批評家の論説を引用することゝする。夫からラッサールの見解とマルクスの夫との乖離が論せられてゐる處では斯の如き見解の堅實性如何を試み、最後に吾人の見解を以てすれば、事實存在する所のマルクスとラッサールとの價值觀上の相違を述べらる積りである。

## 第一章 從來の批評に含まるゝマルクス價

### 値論とラッサール價值論の相違

既に本篇序論に於て述べた如く、マルクス價值論とラッサール價值論との相違に關する最も通俗なる見解は斯ふである、即ち此の相違は全く「社會的に必要なる勞働」てふ概念の觀方の相違を措いてないとなすものである。斯の如き見解は、吾々の知る範圍内では、ハインリッヒ・フォン・ジュウベルに由つてその著「現代の社會主義及び共產主義學說」(一八七二年)に公にせられたのが濫觴である。夫から、同じ見解は又フランツ・メーリングに由つてその著「ドイツ社會民主主義その歴史と學說」(一八七七年)に於て、同様に社會主義の雜誌「未來」の編輯者に由つても代表された。最後に同じ見解は九〇年代の半にもグスターフ・マイヤーやラムバート・オットー・ブランドに由つて信奉せられ辯護せられた。



マルクス價值論とラッサール價值論との相違に關する斯の通説は、七十年代の初めに初めて公にせられてより以來今日に至る迄種々なる方面の論者の間に信奉者を持つてゐるものであるが、之を若干の言葉に要約するならば、次の如くに現はすことが出来る。即ち、その相違はマルクス及びラッサールが凡ゆる價值の唯一の源泉と呼んだ所の『社會的に必要なる労働』が前者に於ては後者に於けるとは別箇の概念を包藏してゐる點にある。即ち、マルクスは『社會的に必要なる労働』を労働が標準的生産條件の下に、熟練と集約度との社會的平均程度とを以て營まれる限り、労働夫自體であると解するに反して、ラッサールは此の『社會的に必要なる労働』の定義に最一つ新しい要素、換言すれば、合目的性の要素、社會の實際の量的欲望に對する適應の要素を移入する。従つて、ラッサールに従へば労働が『社會的に必要』であり、従つて價值構成的であるが爲には、労働は、マルクスの見解の如くに、常に標準的生産關係の下に且つ平均的集約度と熟練性とを以て

營まれるのみならず、社會的欲望の一定量にも照應し此の意味に於て合目的々に營まれるを要する。斯くて『社會的に必要なる労働』の定義は、マルクスの下した如くであれば、偏狹に失し、ラッサールの定義の一部分をしか成さないのである。斯の如き、一切の價值の源泉としての『社會的に必要なる労働』の異つた定義はマルクス、ラッサールをして當然に彼等の經濟的體系に關する第二段の構想に就ても異つた結論に到達せしめたに相違ない。若しさうならなかつたら夫は全くラッサールの撞着に歸するより外はない。

之マルクス價值論とラッサール價值論との相違に關する通説の要約せられた内容である。が暫く此の如き見解の信奉者自身をして語らしめ、彼等の議論を猶ほ仔細に檢することゝしやう。

ハインリッヒ・フォン・ジュウベルがその著『現代の社會主義並に共產主義の教理』に於て述べる所を見るに——マルクスが労働は夫が『社會的に必要なる労働』



である場合に限り價值を作出すると云ふてゐるのは全く正しい。若し蒸汽紡績機械が手で紛ぐ者より同一時間にて三十倍も多量の綿糸を生産するとすれば、手紛ぎの労働者がどれ程慘憺たる勤勉に由つて一箇月間營々としても、彼の綿糸は矢張り一労働日の價值を表はすに過ぎない。併し同様にラッサールの云ふ所も正しい。即ち、人類社會が今日例へば百萬エレの絹を要し、企業家が五百萬エレの絹を生産するとすると絹布一エレの價值は少くとも五分の一に低落せざるを得ぬ、何故なら、全ての個人の欲望は絹布に含まれた労働に匹敵し得ず、従つて支出せられた労働の五分の四は『社會的に必要な』労働ではないからである。ジュウペルは續けて——一見して二つの場合『社會的に必要な労働』てふ言葉は全然異つた意味で用ひられてゐることが判る。初めの場合は夫は一定商品量の生産に必要な労働の最小量を指し、後の場合は市場の總需要を満足せしむる労働の最大量を指してゐる。前の場合には商品價值は生産する労働力の變化に由つて變化する

が、後の場合は労働力に變化はなくとも夫と欲望との關係に由つて變化する(註)。

(註) ハイリッヒ・フォン・ジュウベル『現代の社會主義並に共產主義の教理』ボン、一八七八年、一四一—一五頁。

故にマルクスの價值論とラッサールの價值論との相違は明白である。二人とも、マルクスもラッサールも『社會的に必要な労働』を凡ゆる價值の源泉であると稱する點に變りはないが、併しマルクスは『社會的に必要な労働』なるものを、その労働が一定の客體を生産するに必要な限り、人間労働自體と解するに反し、ラッサールは同じ言葉で常に時間の繼續のみならず、量的なる社會的欲望に對する適應の意味に於ける労働の合目的性をも意味するのである。

凡ゆる價值の源泉としての『社會的に必要な労働』の定義に就て斯の如き差異あることはデュウベルに従へば極めて重大事である。何故かと云ふに、若し労働自體がその合目的性に頓着なく凡ゆる價值の源泉であることを承認するなら



ば、當然の歸結として價值を作出するものは獨り労働者のみである、従つて企業家の利得は排他的に労働者の搾取、即労働利得中賃賃を越へる剰餘の不當なる篡奪に歸着せしめられるとするマルクスに協賛せざるを得ない。が併し、若し労働の合目的性を以て價值の源泉にして尺度なりと稱するならば、之とは別個の結論に到達する。蓋し右の如く云ふならば不可避免的に、「労働に合目的性の性質を印刻し、労働に對して有用なる目的を設定し、此の目的を實現する爲に適當なる手段を見出してその目的に到達せしむる」(註一)人間のみが労働に對して眞に價值を賦與することゝなるからである、又——此の結論を大規模なる工場的製作場或は工場に應用すれば——此の目的の創造者、「使用せられたる素材に對して價值の特質」を賦與する人間と見做され得るものは労働者に非ずして企業家であることとなるからである。「企業家は市況を察し、夫に従つて生産の様式及び範圍を決定する。彼は機械を備へ之を改良し、手工労働者を調達しその撰擇をする」(註二)。

之を要するに、企業家のみが夫自體死せる労働を化して合目的々労働、價值を作出する労働となすものである。併し賃傭労働者は企業家の掌中に於ける單なる道具換言すれば、「魂を入られた人間の道具」に過ぎない。故に、工場の労働過程から觀れば、賃傭労働者は「機械と同格の特殊なる労働具に外ならない」(註三)。従つて賃傭労働者は、「彼等が據て以て協働する機械」(註四)より以外の意味に於ては決して價值を形成するものではない。勿論賃賃は商品の價值中に共に含まれる、が併し、夫は「宛も針や裁庖丁の費用の一部が仕立屋の完成した上着の中に含まれる如く」に入るに過ぎないのである。併しそう云つたからと云つて何人も「針や裁庖丁が右の上着及びその價值を作り出したのだ」とは結論を下すまい。「従つて大工場生産に於て價值並に剰餘價值の作出者は、機械を勤める手工労働者の労働にあらずしてその労働を支配する工場主の頭腦労働である」。(註五)

(註一) ハイブリットヒ・フォン・ジューベル前掲書二九頁



(註二) 同三〇頁

(註三) 同三一頁

(註四) 同

(註五) 同三二頁

ジュウベルに従へば、ラッサールの如く、労働自體ではなくして、合目的的労働を以て凡ゆる價值の源泉と指稱すれば、當然此の如き結論に到達せざるを得ない。併し斯くの如き、一般にマルクスの全經濟的體系と同様にその價值論、剩餘價值論を覆す結論に由つて、マルクスの價值論とラッサールの價值論との間には如何に大なる原則的相違が存在するかが察知出来る。ラッサール自身は此の相違に氣附くには十分聰明でなかつたが、マルクスの鋭敏な頭腦は此の區別を直ぐ看取した。之、マルクスのラッサールに對する抗議ある所以である。

フランツ・メーリングも嘗つてその著『獨逸社會民主主義その歴史と學說』(註)に於てマルクス價值論とラッサール價值論との相違に就てジュウベルと同一の見解

を代表した。彼も亦此の相違をばマルクスとラッサールに於ける『社會的に必要なる労働』概念に關する異つた觀方に歸した。メーリングはマルクスとラッサールが彼等の價值論の説明に用ひた二個の例を引用し相互に比較する事に由つて斯うした觀方の正當なる所以を證明した。

(註) 後段に述ぶるであらう如く、メーリングは此の問題に於ける彼の見解を變更したのであるが、夫にも不拘吾人は前掲の著作に代表された見解を詳細に論ぜねばならぬと信ずる、蓋し此の考へは此の著述の後に現はれた多くの著作の基礎となつたものであるから。

即ち、『資本論』第一卷に於てマルクスは商品の價值中に體現されてゐる社會的に必要なる労働に就て次の如き定義を與へてゐる。社會的に必要なる労働或は社會的に必要なる労働時間とは『現存の社會的に標準的なる生産條件及び社會的平均程度の労働の熟練と集約度を以て何等かの使用價值を現出するに必要な労働時間』(註二)である。そしてマルクスは此の定義を讀者に明瞭に理解せしむる爲に



次の如き例を使用した。「例へば、蒸汽力應用の機械機がイギリスに紹介せられてより以來、一定量の綿絲を綿布に變化するのは従前に比して恐らく半分の時間で充分であつた。イギリスの手機職人は同じ變化を遂げるに以然と同じ労働時間を要したが、此の彼の個人的労働時間の生産物は今や僅に半分の社會的労働時間を表はすに過ぎない、従つてその生産物の従前の價值の半額に低落した譯である。故に——斯くてマルクスは更に結論を進めて——生産物の價值量を決定するものは全く社會的に必要なる労働量、換言すれば、使用價值を作出するに必要な労働時間である」云。(註二)

(註一) 『資本論』第一卷五頁(第四版)

(註二) 同五頁と六頁

所でメーリングは此の文句に對して既に上段に述べたラッサールの五百萬エレの絹布の例を對立せしめて、此の二つの文句を比較して見るにマルクスの社會的

に必要な労働の概念がラッサールの夫と全然別個の概念である事に就ては何等疑ふ餘地が無いと聲明した。「マルクスは労働が個人的怠惰や不熟練や道具の不充分等に由つて浪費せられない限り、労働自體を考へた。併しラッサールは、彼の設例に依れば、彼がその五百萬エレの絹布自體を全く合目的に生産されたものと假定する事は明なるが故に、前掲の如き前提を以て未だ徹底的に十分ではないとする。彼は労働が「個々人の實際の欲望に」即ち社會の目的に適合する場合に始めて、換言すれば労働が合目的に行はれた労働である場合に始めて價值を構成するものと認める。「従つて、ラッサールに従へば」——とメーリングは考へる——「夫自體死せる労働力に社會的なる價值の精靈を吹き込み、死せる労働一般を始めて價值を形成するものたらしめるものは偏へに全く労働の目的である」(註)。

(註) フランツ・メーリング『獨逸社會民主主義の歴史と學說』第三版、ブレイメン、一八七九年、二九



とは云へ、メーリングの見解に依れば、ラッサールは此の合目的性を苟くも價值構成的なる労働の必須なる條件と認める事に由つてマルクスの價值論に一の全く清新なる要素を、而も社會的に變化する欲望の要素を移入した。併し乍、斯の如き要素をマルクス價值論に移入した爲に、「マルクスの教理に於ける一切の特色にして決定的なるもの、一切の社會主義的なものは抹殺される。蓋し果して斯くの如くんば、労働を變化常なき社會の欲望に照して指導する所の企業家は蜂の巢に於ける厄介な雄蜂に似る所か彼等は價值の作出に就て、労働を給附する労働者と變はる所なき大なる持分を持つてゐるからである」(註一)。メーリング謂へらく、さればこそ、マルクスが彼の以前の友人にして門弟なるラッサールに對して、君は余の見解を著しく誤解してると非難したのは如何にも尤もである。何故かと云ふに、若し果して、夫自體死せる労働力を始めて價值構成的なるものたらしむるものは労働の目的を措いて他にないとするのが正しいならば、「マルクスの土

臺石は覆されて、彼が博識の限りを盡してその上に建設した殿堂は一朝にして瓦解して了ふ」(註二)からである。蓋し、果して然らば、必然の歸結として人間の労働のみが價值を作出し得るには相違ないが、従つて價值の缺ぐ可からざる要素であるに相違ないが、夫は直接價值を作出するに非ずして、「個々人の」變化して已むことなき「實際の欲望」に適應し得る場合に限るからである」(註三)。茲に於て、労働をするは労働者の任務であるが、労働を社會の目的に適應せしむるは企業家の任務なるが故に、労働者並に企業家は價值構成に就て「二個の同權の、結局に於て同一強度の要素」(註四)である事を承認せざるを得ない。

(註一) 前掲書二九〇頁

(註二) 同 二九二頁

(註三) 同 二九四頁

(註四) 同 二九五頁

マルクスの價值論並に剩餘價值論は之が爲に否定せられたかの如くである。勞



働夫自體は、労働の合目的性を無視すれば、何等價值を作出するものではない。企業家の労働は生産の目的を決定するにあるが故に價值構成には必須なる要素を成す。企業者利得は故に決して労働者の搾取に依存するものに非ず、寧ろ之は當該労働過程の生産物に對する企業家の價值構成的労働に相當せる配け前である。

一八九四年には「社會經濟學者としてのラッサール」と題するグスターフ・マイヤーの著作が世に出たが、此の著述に於ても吾人は同一の見解に接する。マイヤーも亦謂へらく「マルクスがラッサールは彼の價值論を誤り解したと主張するのであるならば夫はマルクスが『全然勝ちである』。と云ふのは、『マルクスの價值論は事實上ラッサールに於ては全然別個の様相を採つてゐるからである』(註一)と。そして、然らば、斯の如き『全然別個の様相』とは何かと尋ねると、吾人はフォーン・ジーベルやメーリングと同じ答へを受け取る、而もマルクスもラッサールも同様に一切の價值の源泉であると指稱する所の『社會的に必要なる労働』が兩者に於

ては異つた意味を持つてゐるのだと云ふ答へを受け取る。「マルクスに従へば社會的に必要なる労働時間とは現存の社會的に標準的なる生産條件と社會的に平均程度の労働の熟練と集約度とを以て何等かの使用價值を現出するに必要なる労働時間である。ラッサールは之に反して社會的に必要なる労働時間を次の如くに定義してゐる。即ち、社會的に必要なる労働時間とは現在の需要を充足するに必要なるだけの客體を作出するに必要なる労働時間を意味する」と(註二)。

(註一) グスターフ・マイヤー『社會經濟學者としてのラッサール』ベルリン、一八九四年、一〇三頁

(註二) ラッサールに於ては如何なる部分にも『社會的に必要なる労働時間』に就て文字通り斯くの如き定義は見當らない。

マイヤーは直ぐ續けて云ふ——『是等二つの觀方の深刻なる差別は容易に認識せられる。マルクスは社會的に必要なる労働時間の定義に於て、一般に彼の全ての價值論に於けるが如く、徹頭徹尾欲望の要素を無視したに對してラッサールの



定義は飽く迄此の要素に依頼してゐる。マルクスが需要供給の關係を態と思ひ切つて排すれば、ラッサールは彼の定義を以て又此の個人主義的國民經濟の特効藥を移入する』。(註二)そしてジューベルや、メーリング等の御多聞に洩れず、マイヤーも之をラッサールの有名な五百萬エルの絹布の例に依つて證明し、彼等と同様に夫から同じ結論を引き出してゐる。曰はく『當該商品に對する需要の抽出こそは、マルクスの價值論に社會主義的性質を賦與したものである。然るにラッサールは商品の價值は正しく需要の動搖に左右せられるとして、識らずく、完全に資本主義的經濟秩序を基礎として自由主義經濟學者に左胆したのである』(註三)

(註一) グスターフ・マイヤー前掲同書一〇三—一〇四頁

(註二) 同一〇五—一〇六頁

その結果、ラッサールの社會主義的推斷は夫が彼の價值論から演釋せられたものである限りに於て、此の價值論そのものとは甚だしく矛盾するに至る。例へば、

斯くては、ラッサールがその價值説から如何にして労働者の完全なる労働收益に對する權利及び企業家利得の違法性を演釋するのであるか解するを得ない。「何故ならば、交換經濟的に組織された國民經濟内に於ては企業家階級が常に欠く可からざるものである許りでなく、剩へ直接に初めて價值を作出するものなる事は實にその價值論當然の歸結であらうからである。現代に於ける企業家は消費と生産の無規律なる混沌の中へ秩序を齎さうと努め、既存の財貨貯藏量と欲望充足に必要な財貨量とを比較し夫に應じて生産に量的、質的方針を與ゆる底の要素である。企業家は市況を研究してその生産的活動を全體の欲望に従屬せしめる。勿論彼は之を無償とする理由はない。財貨の賣却の際に彼の有に歸する生産費用以上の餘利即ち企業利得は、故に、今日の事情の下では充分正當である。若し労働者が嚮導なく、世界市場の法則を熟知せずして、世界市場目當に漫然と生産するならば、その労働は殆ど決して價值作出的労働でないであらう」(註)



(註) グスターフ・マイヤー前掲書一〇六一—一〇七頁

つまりマイヤーのこの記述は完全に彼が屢々引用した「ドイツ社會民主主義の歴史と學說」の著者メーリングの所論に依るものである。

最後に吾人はランペルト・オットー・ブランドの論文「フェルヂナンド・ラッサールの社會經濟的見解と實際的提案」(註)に於ても同一の意見に接する。

(註) エル・オー・ブランド「フェルヂナンド・ラッサールの社會經濟的見解と實際的提案」イエナ、一八九五年、五〇頁

そして吾々が初めに引用した著者達は當時未だ彼等の代表せる見解は何等かの證明に由つて確立する義務ありと信じたが、エル・オー・ブランドに至つては夫を最早全く無用の沙汰と考へた。彼は既に久しく確立せる事實を確説すれば足りた。

そして實際、マルクスとラッサールとの價值論の差異を社會的に必要なる労働概念の異つた觀方に歸着せしむる見解は、マルクス價值論の敵からも味方から

も、信奉者からも反對者からも一樣に採用された位に普及してゐた。

従つて例へば社會主義の雜誌「未來」に於ても、偶々フランツ・メーリングの著書「獨逸社會民主主義の歴史と學說」の批評に際してマルクス價值論の信奉者たるその批評家の次の如き評言が載せられた。「ラッサール始めマルクスの他の門下達はマルクスの解する「社會的に必要なる労働時間」概念……(茲にマルクスの社會的に必要なる労働の定義が續く)……に猶ほ次の如き意味を附加した。即ち社會の實際の欲望を充すに必要なる一定量の生産物を供給するに必要なる労働時間なる意味を附加した。その差違は明白である。併し斯の如き解釋は少くとも、夫が資本論にて展開せられてゐる限りマルクスの價值論とは何等の縁りもないものである」。(註)

(註) 社會主義的評論「未來」ベルリン・一八七七年、九四頁附録、

そして右の批評家の斯の如き評言に由つて、「未來」の編輯者も亦通説に同意で